

2004年度

「学生による授業評価アンケート」
報告書

2004年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立 教 大 学

2005年10月

はじめに

総 長

今回のアンケート調査は、立教大学初の全学をあげての授業評価の取組みである。2002年度の全学教務委員会FD専門部会の立上げから3年にわたる努力の結実であり、この事業にかかわった方々に感謝申し上げたい。ここにいたるまでの経緯は、後述の「1. 授業評価アンケートの実施目的」に詳しい。

アンケートの結果、全学的に多くの貴重な情報を得ることができた。また、多数の教員が各自の授業改善へのヒントを得たと聞いている。立教大学全体の教育改善の方針と、教員個々の授業改善の主体的意志とが、ひとつに結び合ったのである。このもっとも重要な点において、今回の授業評価アンケートは成功であったと言える。

アンケート調査の結果の内容に少し立ち入ると、本報告書15ページに全学総評の要点として、次のような点があげられている。

学生からの授業評価は、全体的におおよそ良好であった。

1年生から4年生へと学年が進行するに従って、授業に対する評価は上っている。

これらは、全体として、立教大学の教育的営為が学生の視点からも評価されたことを意味すると考えられる。

このアンケートから授業改善へのヒントを得たと認識した教員は少なくない。さらに今後の授業改善に関する課題が明示された。

ここからは、個々の教員における教育の良い点を再発見し、それをさらに深化させる試みの展開が期待される。

授業規模では50名以下の授業の評価が最も高く、大人数授業の評価は低いこと、また、大教室の問題は、自由記述のデータからも指摘が多かった。

この点は、望ましい学習環境、授業環境を維持するために、全学的な取組みが今後必要であることを示している。

また、以下の諸点は、問題の解決にあたって、各学部・学科からの積極的な議論、提案が強く期待される部分である。そうした議論、提案を大学としての大きな授業改善の動きと連動させ、アンケートで明らかになった問題を解決していきたいと考える。

履修登録者数と比べ回答者数の比率が低く、日常の授業の出席率が低いという問題が認識された。

重要な問題として受け止められる必要がある。いわゆる「保険履修登録」、学期中の履修放棄など、履修システムに関する問題は、履修上限の見直し、GPAの導入などによって大幅に改善されることが期待される。しかしそれと同時に、学生の授業への出席率の問題は、大学教育と直結したさまざまな問題を含んでいると考えられる。

学生諸君が講義時間以外に予習復習にかける時間は、圧倒的に少ない。

学生の主体的な学習を動機づける方策を検討することがぜひ必要な深刻な問題であろう。

学部間で授業評価に有意の差はあるものの、評価の低い学部においても絶対的な水準では低くない。

今回のような授業評価は、学問上の性質もあり、各学部の教育の質の絶対的な良し悪しを測定しているものではない。このことを踏まえた上で、この結果から、評価の高い学部においては教育的視点からの利点の明確化とその全学的な共有、評価の低い学部においては原因の検討などに取り組むことが望まれる。

授業技術に関しては、特に板書の仕方に関する否定的な意見が多い。

この点は、教授法の技術的側面に関する意見のなかでも象徴的な意味をもつ指摘であったと思われる。教員の側から見ればさして重要性をもつと思われない教授技術が、学生の側からすれば学習上の大きな問題になっている。講義における教材の提示方法など、他の授業技術に関しても、さまざまな観点からの検討が可能であろう。

2005年度には、2年目をむかえた授業評価アンケート以外にも、「導入教育の再点検」「新入生オリエンテーションのシステムとしての再構築」「シラバスの再点検」「成績評価の一層の厳正化への取り組み」などが、全学的なFDとして進められている。このような試みが繰り返されていくことによって、立教大学の教育・研究のさらなる発展が可能となる。学生による授業評価アンケートはこうしたFD活動の展開にとって不可欠の存在であり、今後とも改善を加えつつ継続的に取り組みたい。

目次

はじめに	
1．授業評価アンケートの実施目的	
1 - 1	目的 1
1 - 2	「報告書」作成の基本的な考え方 2
1 - 3	「所見票」について 3
2．授業評価アンケートの実施概要	
2 - 1	実施方式 7
2 - 2	設問項目 7
2 - 3	実施対象科目 11
2 - 4	実施教員数・実施科目数 11
2 - 5	実施期間 11
2 - 6	回答数（全学・学部別） 12
3．授業評価アンケートの集計方法	
3 - 1	分析の概要 13
3 - 2	提供データについて 13
3 - 3	統計的分析について 13
4．全学総評	
4 - 1	全学総評の要点 15
4 - 2	集計データからみられる結果のまとめ 15
4 - 3	担当教員からの所見票に対するまとめ 23
5．学部等総評	
5 - 1	文学部 25
5 - 2	経済学部 28
5 - 3	理学部 31
5 - 4	社会学部 35
5 - 5	法学部 41
5 - 6	観光学部 45
5 - 7	コミュニティ福祉学部 49
5 - 8	全学共通カリキュラム 53
5 - 9	学校・社会教育講座 58
6．集計データについて（資料編）	
6 - 1	学年および学内・学外者の度数 65
6 - 2	項目内容と項目別平均値（全体） 66
6 - 3	回答者数/登録者数の比率 67
6 - 4	「総合評価」の平均値の学部間の比較 68
6 - 5	「総合評価」の平均値の授業規模による比較 70
6 - 6	項目の相関 71
6 - 7	「総合評価」の平均値の学年間の比較 72
6 - 8	「所見集」の設置場所 73

1. 授業評価アンケートの実施目的

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて 学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。

教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。

学生の学習姿勢を知るための資料とする。

学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。

学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。

学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。

大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能することを目指して改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案

し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1 - 2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が1 - 1で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そして次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術の方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている 学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての 学生の学習姿勢を知るための資料、および学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的のとは次に述べられる所見票に示されるだろう。 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票(とその集成である所見集)に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

1 - 3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(P.5参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが1冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。

学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。

アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。

改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回のアンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

2004 年度前期立教大学授業評価アンケート 所見票

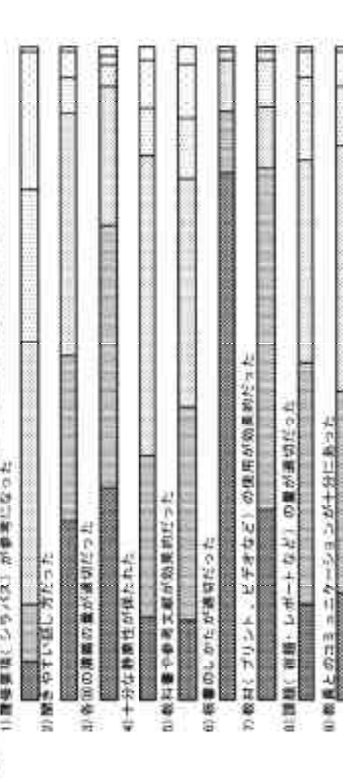
科目コード 火 担当者 受講者数 267
 科目名 1-1 教室 8202 回答数 151

単純集計結果 1. ともう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. あまりそう思わない 1. そう思わない (割合%)

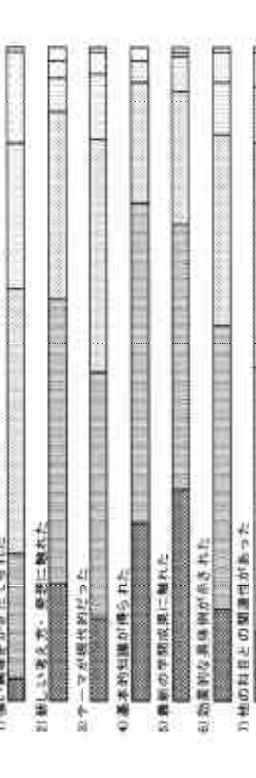
1. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度あてはまりますか。



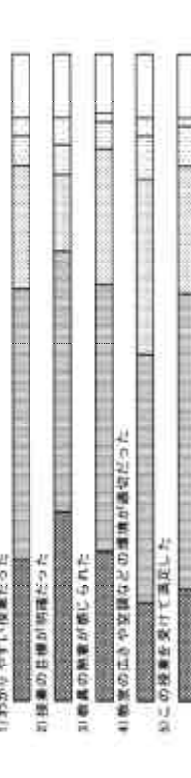
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度あてはまりますか。



III. この授業の内容は、以下の項目にどの程度あてはまりますか。



IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度あてはまりますか。



授業評価に対する担当教員の所見

○○○○は、普段になげなく当然のことと見過ごしがちなわたしたちの住む地球の大気の大気現象をかみくだいて説明し、さらに成層圏オゾンの重要な役割や地球温暖化の科学面からのアプローチ、そして壮大な大気現象であるオロロラの運を伝えることで地球の大切さを改めて認識する作業を授業のなかで行ってゆくことを目的としている。全体として、回答してくれた150名の大多数がかなりの出席率であったことから、学生の興味をひきつけることにある程度成功したと考えている。それぞれの評価結果については、まず現象の認識にはパワーポイントを用いているがIIの7が高い評価を得ていること、問題を認識させることには成功していると言え、IIIの3、4の低い評価とIVの1、2、5の結果に、IVの1、2、3の結果とを合わせると授業の目的はかなりの程度達成されていると考えられる。

自由記述欄に対する担当教員の所見

ほぼ150名の回答者の4割に当たる60名が何らかの記述を書せてくれている。群を抜いて多い項目は「私語厳禁、携帯OFF、15分遅刻入室禁止」への記述である。方針を「良い」とする意見24名、厳しすぎると思う意見2名であった。教室内が静かでないことと教員の授業意欲がわかないので、学生にはその点は情に願ってほしいということの表れであるが、大多数の学生がそれを指示してくれていることがわかった。毎回スクリンに映す資料をプリントで配布する方式には11名が「良い」との意見で、NOはゼロ。前回の質問への回答を次回冒頭でする方式にも9名が「良い」、NOゼロであった。また、少数意見ではあるが、話すペースが少し遅いと感じるとの意見が2名、取り扱うテーマが多すぎるが2名いた。

改善に向けた今後の方針

あまりにも身近な現象であるために見過ごされがちな大気現象をこれからはわかりやすく伝えていきたい。指摘されているテーマの多さもテーマ間のつながりが明確になれば、ある程度解消されると考えている。教室内を静寂に保つ方針に関しては今後とも現在の方法を進めてゆくつもりである。

2 . 授業評価アンケートの実施の概要

2 - 1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内(授業開始から 30 分間、もしくは授業終了前の 30 分間)において行うこととした。

なお、実施委員会では、アンケートの実施にあたって、その方式として、質問紙による方式と Web による方式とが検討された。全体の業務量や集計データの加工の容易さからすると Web による方式が望ましいと考えられたが、検討の結果、授業評価アンケートが定着していない現状では、有意の回収率を得ることが難しいと判断し、質問紙による方式を採用した。

2 - 2 設問項目

アンケートの質問紙は、5 段階による評価方式の設問を 23 設問、自由記述欄を 2 箇所の構成とした (P.8、P.9 参照)。設問は、実施委員会が原案を作成し、学部等 F D 委員との協議を経て決定された。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もあった。例えば、「板書のしかたが適切だった」との設問は、板書を使用しない授業を行う教員には必要がない、といったケースである。従って、実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとした。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1 学部あたり最大で 7 設問を設定できるようにした。2004 年度は、経済学部(2 設問)、理学部(1 設問)、観光学部(7 設問)が学部設問項目を利用した (P.10 参照)。

2004年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し更に充実させることを目的に行われます。回答の内容が、この授業についてのあなたの成績評価に影響することは全くありません。また、この調査は全ての項目について5の評価が得られることを理想としていません。率直かつ責任をもった回答をお願いします。

立教大学

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード	本学学部生
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	学部 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	学科 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	学年 ① ② ③ ④
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	本学学部生以外 ☐
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 鉛筆は消しゴムで完全に消すこと。 4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 科目コードにマークミスがあった場合にはこの調査票は無効となる。 6. 折りまげたり汚したりしないこと。

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない
〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満	⑤ ④ ③ ② ①
2) この授業に積極的に参加した	⑤ ④ ③ ② ①
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	⑤ ④ ③ ② ①
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	⑤ ④ ③ ② ①
6) 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (次の中から選んでマークしてください) 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間	⑤ ④ ③ ② ①
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 聞きやすい話し方だった	⑤ ④ ③ ② ①
2) 各回の授業内容の量が適切だった	⑤ ④ ③ ② ①
3) 各回の授業のねらいは明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
4) 各回の授業内容は明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
5) 十分な静粛性が保たれた	⑤ ④ ③ ② ①
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	⑤ ④ ③ ② ①
7) 板書のしかたが適切だった	⑤ ④ ③ ② ①
8) 映像視覚教材 (ビデオ、OHP、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	⑤ ④ ③ ② ①
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	⑤ ④ ③ ② ①
III. この授業の内容は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 新しい考え方・発想に触れた	⑤ ④ ③ ② ①
2) 基本的知識が得られた	⑤ ④ ③ ② ①
3) テーマが現代的な意味を持っていた	⑤ ④ ③ ② ①
4) 最新の学問成果に触れた	⑤ ④ ③ ② ①
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) わかりやすい授業だった	⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業全体の目標が明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
3) 学問的興味をかきたてられた	⑤ ④ ③ ② ①
4) この授業を受けて満足した	⑤ ④ ③ ② ①

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

V. 学部等による設問					
1) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤	④	③	②	①
2) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤	④	③	②	①
3) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤	④	③	②	①
4) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤	④	③	②	①
5) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤	④	③	②	①
6) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤	④	③	②	①
7) 別途の指示に従ってマークしてください	⑤	④	③	②	①

VI. 自由記述 (以下の質問について自由にお答えください)

1) この授業で良いと思った点があれば書いてください。

2) この授業で改善すべき点があったら書いてください。

ご協力ありがとうございました

2004 年度立教大学授業評価アンケート

・学部等による設問

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、別紙『2004 年度立教大学授業評価アンケート』裏面の「 ．学部等による設問」〔評価欄〕にマークしてください。

5：とてもそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない
1：そう思わない

(経済学部)

1) この授業の教室の大きさは適切だった。

(理学部)

1) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた。

(観光学部)

1) わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ。(観光学部以外の学生は答えないこと)

2) わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う。

3) わたしは、武蔵野新座キャンパスで学ぶことに満足している。

4) わたしは、旅行することが好きだ。

5) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した。

6) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた。

7) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた。

以 上

2 - 3 実施対象科目

実施科目は、学部講義科目（学校・社会教育講座および全学共通カリキュラムを含む）を対象とし、専任教員、兼任教員を問わず、2004年度中に1教員1科目について実施することを原則とした。

実施科目の選定は、学部等FD委員会が、この原則に従いつつカリキュラムとの関連等を考慮し行った。なお、学部等FD委員会の判断で必要に応じて1教員複数科目の実施も可とした。また、全学共通カリキュラム運営センターの決定により、全学共通カリキュラム総合教育科目を担当する教員は、専門科目での実施にかかわらず、全学共通カリキュラム総合教育科目を対象として1教員1科目の実施が適用された。

2 - 4 実施教員数・実施科目数

（2005年6月21日現在）

	対 象 科目数	担当者内訳		実 施 科目数	担当者内訳		所見票 提出数	担当者内訳	
		専 任	兼 任		専 任	兼 任		専 任	兼 任
文 学 部	197	52	145	192	51	141	165	44	121
経 済 学 部	98	38	60	95	38	57	92	38	54
理 学 部	108	60	48	104	59	45	97	55	42
社 会 学 部	123	34	89	121	33	88	105	28	77
法 学 部	67	36	31	65	36	29	54	32	22
観 光 学 部	60	16	44	56	16	40	52	14	38
コミュニティ福祉学部	72	24	48	70	22	48	59	19	40
全学共通カリキュラム	200	68	132	196	66	130	171	57	114
学校・社会教育講座	56	8	48	52	8	44	48	8	40
合 計	981	336	645	951	329	622	843	295	548

注1) 通年科目の前期・後期で異なる科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合、前期1科目・後期1科目としてカウントした。

注2) 半期科目で複数の科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合、各科目担当者毎に1科目としてカウントした。

2 - 5 実施期間

実施は、授業が進行した後半の時期が好ましい 試験の時期は避けることから下記の期間とした。

前期： 2004年6月24日（木）から6月30日（水）

後期： 2004年12月9日（木）から12月15日（水）

上記期間内に実施できない場合は翌週に実施することとした。

2 - 6 回答数 (全学・学部別)

	前 期		後 期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	8,792	5,369	7,486	4,021	16,278	9,390
経 済 学 部	365	146	22,298	7,124	22,663	7,270
理 学 部	2,868	1,825	3,163	1,486	6,031	3,311
社 会 学 部	8,255	3,716	8,616	3,430	16,871	7,146
法 学 部	8,912	3,684	12,769	3,539	21,681	7,223
観 光 学 部	2,910	1,367	4,259	1,755	7,169	3,122
コミュニティ福祉学部	4,006	2,222	3,153	1,472	7,159	3,694
全学共通カリキュラム	20,544	9,418	18,255	7,545	38,799	16,963
学校・社会教育講座	2,690	1,871	859	613	3,549	2,484
合 計	59,342	29,618	80,858	30,985	140,200	60,603

注) 履修者数・回答者数はいずれも述べ人数

3 . 授業評価アンケートの集計方法

3 - 1 分析の概要

以下の分析を実施した。

1) 基本的分析

基本的データとして 各学年および学内・学外の度数 項目内容と、全学の全質問項目に関する度数、最小値、最大値、平均値および標準偏差 学部別の回答者数および登録者数の度数と回答者数 / 登録者数の比率 (%)、各学部の全質問項目に関する平均値および標準偏差を算出した。

2) 学部間の違い

学部間の差を検討するため、アンケートの「 . 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。」(P.8 参照。以下「総合評価」とする。)の各質問項目について、平均値の差の検定(一要因の分散分析、多重比較)を行った。

3) 規模別群の間の違い

規模別(回答者 50 名以下、51 ~ 100 名、101 ~ 150 名、151 名以上)に群分けし、規模別群間の差を検討するため、「総合評価」の各質問項目について、平均値の差の検定(一要因の分散分析、多重比較)を行った。

4) 項目の関連

質問項目間に関連があるか検討するため、各質問項目間でピアソンの相関係数を算出し、無相関の検定を行った。

5) 学年間の違い

学年間の差を検討するため、「総合評価」の各質問項目について、平均値の差の検定(一要因の分散分析、多重比較)を行った。

3 - 2 提供データについて

1) 各学部等 F D 委員に渡したデータ

上記「3-1 分析の概要」に掲げた 1) から 5) すべてのデータ。ただし、「1) 各学部の全質問項目に関する平均値および標準偏差」は、当該学部のもののみを提供した。

2) 各教員に渡したデータ

アンケートを実施した科目に関して、以下の 3 種類のデータを送付した。

フェイス : 科目コード、科目名、開講曜日・時限、担当者、教室、受講者数(登録数)、回答数

各質問項目に関する、単純集計結果(回答者の平均値、度数に関する積み上げ棒グラフ) 学生による、自由記述のリスト

3 - 3 統計的分析について

本報告書を読む上で必要な、統計的ことがらに関する説明を以下にまとめた。(アルファベット順)

1) 平均値の比較 : 一要因の分散分析

- 本分析では、一要因の分散分析の後、事後検定として多重比較(tukey の HSD)を実施。

2) 相関分析

- aおよびbという項目があった場合、aに1(低い得点)をつけた人が皆bにも1(低い得点)をつければ、相関は強くなる。
- 二つの項目の数値が同じ傾向の動きをするほど相関は強くなる。まったく同じ動きであれば、相関係数は1.0となり、真逆の動き(一方に1をつけた人はもう一方に5をつける)をすれば、-1.0となる。まったくばらばらであれば、相関係数は0.0となる。

3) 統計の有意性

- 統計的に検討した結果、ある程度の確率(偶然で起こるとしたら5%、すなわち20回に1回しか起こらないというほどの差。統計的には意味があると考え)で、その統計の結果が確からしいと確かめられたもの。
- 例： $< .01$ と表記されている場合、1%水準

4) 有意差

- 統計的に検討した結果、ある程度の確率(偶然で起こるとしたら5%、すなわち20回に1回しか起こらないというほどの差。統計的には意味があると考え)で、そのグループ間に差があると確かめられたもの(3)統計の有意性もあわせて参照のこと。

4 . 全学総評

全学総評は、全学の集計データと、5章にまとめられている学部等総評をもとに、実施委員会が執筆した。

4 - 1 全学総評の要点

全学的な特徴を要約すると、以下の9点にまとめられる。

学生からの授業評価は、全体的におおよそ良好な評価であった。

回答者数 / 履修登録者数の比率が低く、日常の授業の出席率の問題が認識された。

講義時間以外で、学生の予習復習にかかる時間が圧倒的に少ない。

学部間で授業評価に有意な差はあるものの、評価の低い学部においても絶対的な水準では低くない。

授業技術に関しては、板書の仕方に関する否定的な意見が多い。

学生の講義に対する「満足度」は「聞きやすい話し方」、「授業のねらいの明確さ」、「授業内容の明確さ」、「新しい考え方・発想」、「基本的知識」、「わかりやすさ」、「授業全体の目標の明確さ」、「学問的興味」に関連する。

授業規模では50名以下の授業の評価が最も高く、大人数授業の評価は低い。また、大教室問題は、自由記述のデータからも指摘が多かった。

1年生から4年生と学年が進行するに従って、授業に対する評価は上る。

多くの教員は、このアンケートから授業改善へのヒントを得たと認識しており、今後の授業改善に関する課題が明示された。

4 - 2 集計データから見られる結果のまとめ

1) 学年および学内・学外者の度数(資料編P.65表1、表2、図1。表1、表2は以下に再掲した。)

アンケートに回答した学年の人数は、表1、2に示した通りである。このデータからは、4年生の比率は少ないが、それに対して1、2、3年生がほぼ同じ比率で講義を受講していることがわかる。この事実は、将来の履修上限の設定などに参考になるデータである。

学内者に対する学外者の比率は、極端に少なく、今後の単位互換制度などの運用を考える上で参考になるデータになる。

表1 学年の度数および%

学年	度数	%
1年	16,626	27.4
2年	20,372	33.6
3年	16,436	27.1
4年	5,285	8.7
不明	1,884	3.1
計	60,603	100.0

表2 学内者・学外者の度数および%

	度数	%
学外	631	1.0
学内	59,972	99.0
計	60,603	100.0

- 2) 全体の各項目に関する平均値から見たまとめ(資料編 P.66 表 3、図 2。表 3 は P.20 にも再掲した。)

全学の集計データの平均値から、以下の各点が明らかになった。

講義に出席している学生の授業への出席率は高く、おおむね積極的に参加している。しかし、学生は講義時間以外で予習復習に充てる時間はほとんどなく、履修の準備、発展的な学習の不足については自覚している。

授業の進め方、教材教具の使用などに関しては、板書について改善の余地はあるものの、その他の点についてはおおむね良好な評価が得られた。

授業の内容については、新しい考え方・発想の提示、基礎的内容、応用的な内容いずれも高い評価を得た。それらと比較すると、最新の学問成果の提示については若干劣っている。

総合評価については、「分かりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」のいずれに対してもおおむね良好な評価を得た。

しかし、これらのデータはいずれも講義に出席している学生からの評価であり、回答者数/履修登録者数の比率をみると、アンケート結果に表れてこない授業に参加していない学生の動向、評価の把握と、こうした学生たちへの大学としての対策の必要性がクローズアップされた結果といえよう。

- 3) 各項目への反応の分析と、まとめ

アンケートは、4つのグループから構成されている。そのグループとは、「この授業へのあなたの取り組み方」、「この授業の進め方」、「この授業の内容」、「総合評価」である。

以下、各グループ別に、各項目への反応の分析とグループ全体のまとめを述べることにする。

・「この授業へのあなたの取り組み方」

- 1:「授業全体を通じての出席率」については平均値が 4.37 であり、おおむね出席率が 70% を上回る(5:90%以上、4:70-89%)高い学生の自己評価であった。しかしこの点については、後に述べる回答者数/履修登録者数の低さを勘案する必要がある。また、半期の授業の後半にアンケートが行われたため、そこまで継続的に出席していた学生の回答であることを考慮する必要がある。
- 2:「この授業に積極的に参加した」については平均値が 3.58 であり、おおむね高い数値といえよう。しかしこの結果も上述した学生の反応であることを考慮する必要がある。
- 3:「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」についての回答の平均値は理論的な中央値 3 を下回る 2.65 であり、1、2 に示された授業への取り組みの姿勢と比較して、全体的に否定的な学生の自己評価が示された。
- 4:「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」についても平均値 2.72 であり、講義の予習とともに復習、さらには発展的な学習へとはつながっていない様子が示され

ている。

- 5:「シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った」については平均値 3.18 であり、若干肯定的な方向の回答であるが、肯定的否定的な反応が相半ばというところであろう。学生の評価からはシラバスの改善の余地はあると考えられる。
- 6:「授業の予習復習等に毎週あてた時間」については平均値 1.56、すなわち、1 時間未満もしくはゼロ時間が相半ばしている反応である(2:1 時間未満、1:0 時間)。この結果は、3 や 4 の結果をさらに鮮明な形で示した学生の反応であり、学生たちは講義時間以外での学習がほとんど行われていない実態が示された。

この項目群の平均値から読み取れる結果は、「過半数の学生は講義に継続的に出席していないが」(後述)「講義に出席している学生は、出席率もよくある程度積極的に授業に参加している。しかし、その講義に出席している学生たちでさえ、授業時間以外にはほとんど学習の時間は取っておらず、授業の準備や発展的な学習の不足をある程度自覚している」ことを示している。

またシラバスの学生からの評価は、肯定的否定的相半ばである。

.「この授業の進め方」

- 1:「聞きやすい話し方だった」についての平均値は 3.68 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 2:「各回の授業内容の量が適切だった」についての平均値は 3.72 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 3:「各回の授業のねらいは明確だった」についての平均値は 3.71 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 4:「各回の授業内容は明確だった」についての平均値は 3.73 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 5:「十分な静粛性が保たれた」についての平均値は 3.68 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 6:「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」についての平均値は 3.55 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 7:「板書の仕方が適切だった」についての平均値は 3.04 であり、評価は肯定的否定的相半ばである。
- 8:「映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的だった」についての平均値は 3.29 であり、やや肯定的な反応だった。
- 9:「教員は授業の準備を周到に行っていた」についての平均値は 3.98 であり、高い数値といえよう。

授業に出席している学生からの評価は、「話し方」「量」「ねらい」「内容」「静粛性」について、全学的な観点からはおおむね肯定的な評価である。「教科書・授業レジュメプリントや参考文献」、「映像視覚教材」などについてもおおむね肯定的な反応であった。しか

し、「板書」についての評価は、肯定的否定的相半ばで改善の余地がある。最後に「教員の授業の準備」については高い評価が示されており、授業に出席している学生には教員の熱意が伝わっているようである。

・「この授業の内容」

- 1:「新しい考え方・発想に触れた」についての平均値は 3.74 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 2:「基本的知識が得られた」についての平均値は 3.80 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 3:「テーマが現代的な意味を持っていた」についての平均値は 3.81 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 4:「最新の学問成果に触れた」についての平均値は 3.55 であり、おおむね高い数値といえよう。

講義内容の「新しい考え方・発想」の提示や、「基礎的知識」「テーマの現代的な意味」などの基礎的内容、応用的な内容の両方に関して、肯定的な反応が得られている。しかし、それらの項目に比較すると「最新の学問成果」の提示は、やや得点が低く、学問内容にもよるが、講義内容についての毎年の更新についての検討も余地があろう。

・「総合評価」

- 1:「わかりやすい授業だった」についての平均値は 3.61 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 2:「授業全体の目標が明確だった」についての平均値は 3.65 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 3:「学問的興味をかきたてられた」についての平均値は 3.45 であり、おおむね高い数値といえよう。
- 4:「この授業を受けて満足した」についての平均値は 3.56 であり、おおむね高い数値といえよう。

講義の「分かりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」のいずれに対しても、3.5 程度もしくはそれを上回る平均値を得ており、文字通り「おおむね良好」な結果といえる。

4) 回答者数/履修登録者数の比率について(資料編 P.67 表4)

資格課程である学校・社会教育講座の 75.10%以外は、すべての学部で 50%台、もしくはそれ以下の数値であり、全学で 44.34%と出席率の低さが際立っている。今回の分析では、選択科目、必修科目の別は、考慮されていないので、さらに詳しい分析と考察が必要ではあるが、全学的傾向の原因として可能性のあることは以下の各点である。

いわゆる保険登録の学生が多いこと。

講義期間中に履修をやめてしまう学生が多いこと。

出席しなくても単位認定される講義が多いこと。

上述したいずれのことが原因であるにせよ、全学の学生への教育責任という観点からは、対策を講じる必要があろう。

「いわゆる保険登録の学生が多いこと」、「講義期間中に履修をやめてしまう学生が多いこと」に対する対策として、現在検討されている履修上限の設定、GPA制度の導入は、こうした問題への1つの有効な対策となる可能性がある。

また、「出席しなくても単位認定される講義が多いこと」に対する対策としては、出席管理の強化、授業内課題の重点化、もしくは、成績評価における授業への出席と、レポートなど課題、試験の重みづけのシラバスへの明示（例えば、授業への出席は重視しないことの明示）などを考える必要があろう。

表3 項目別平均値(全体)

	項目	人数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1	授業全体を通じての出席率(5:90%以上, 4:70-89%, 3:50-69%, 2:30-49%, 1:30%未満)	60495	1.00	5.00	4.37	0.90
2	この授業に積極的に参加した	60501	1.00	5.00	3.58	1.09
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	60449	1.00	5.00	2.65	1.04
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	60375	1.00	5.00	2.72	1.11
5	シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	60190	1.00	5.00	3.18	1.08
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間(5:3時間以上, 4:2-3時間, 3:1-2時間, 2:1時間未満, 1:0時間)	60388	1.00	5.00	1.56	0.84
この授業の進め方は...						
1	聞きやすい話し方だった	60498	1.00	5.00	3.68	1.16
2	各回の授業内容の量が適切だった	60448	1.00	5.00	3.72	1.02
3	各回の授業のねらいは明確だった	60404	1.00	5.00	3.71	1.04
4	各回の授業内容は明確だった	60335	1.00	5.00	3.73	1.05
5	十分な静粛性が保たれた	60342	1.00	5.00	3.68	1.20
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	60296	1.00	5.00	3.55	1.12
7	板書のしかたが適切だった	60061	1.00	5.00	3.04	1.13
8	映像視覚教材(ビデオ, OHP, パワーポイントなど)の使用が効果的だった	59776	1.00	5.00	3.29	1.29
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	60261	1.00	5.00	3.98	0.94
この授業の内容は...						
1	新しい考え方・発想に触れた	60424	1.00	5.00	3.74	1.02
2	基本的知識が得られた	60422	1.00	5.00	3.80	0.98
3	テーマが現代的な意味を持っていた	60385	1.00	5.00	3.81	1.04
4	最新の学問成果に触れた	60319	1.00	5.00	3.35	1.04
総合的にみて, この授業は...						
1	わかりやすい授業だった	60409	1.00	5.00	3.61	1.15
2	授業全体の目標が明確だった	60400	1.00	5.00	3.65	1.04
3	学問的興味をかきたてられた	60395	1.00	5.00	3.45	1.14
4	この授業を受けて満足した	60394	1.00	5.00	3.56	1.15

5) 「 . 総合評価」の平均値の学部間の違い(資料編 P.69 表5~表8)

- 1:「わかりやすい授業だった」に関しては、学校・社会教育講座(3.85)、文学部(3.75)、観光学部(3.70)は比較的平均値が高いグループを形成しており、理学部(3.37)、法学部(3.46)、経済学部(3.51)が比較的平均値が低いグループを形成していた。
- 2:「授業全体の目標が明確だった」に関しては、学校・社会教育講座(3.86)、文学部(3.76)、観光学部(3.75)は比較的平均値が高いグループを形成しており、理学部(3.54)、法学部(3.54)、経済学部(3.58)が比較的平均値が低いグループを形成していた。
- 3:「学問的興味をかき立てられた」に関しては、文学部(3.62)、コミュニティ福祉学部(3.57)、観光学部(3.54)は比較的平均値が高いグループを形成しており、経済学部(3.31)、理学部(3.32)、法学部(3.38)が比較的平均値が低いグループを形成していた。
- 4:「この授業を受けて満足した」に関しては、文学部(3.72)、学校・社会教育講座(3.70)、観光学部(3.67)は比較的平均値が高いグループを形成しており、理学部(3.40)、法学部(3.44)、経済学部(3.45)が比較的平均値が低いグループを形成していた。

学生の授業に対する総合評価を学部間で比較すると、相対的に学校・社会教育講座、文学部、観光学部の評価が高く、理学部、法学部、経済学部の評価が低いことが示された。しかし、評価の低いグループの平均値はいずれも3点を上回る数値であり、絶対的な評定基準としては、評価が低いわけではない。

また、総合評価の高低は、その学問領域における講義科目の位置づけ、学問の性質による講義内容の違いなども考慮しなければならないであろう。

6) 「 . 総合評価」の平均値の授業規模による比較(資料編 P.70 表9~13)

授業規模を50名以下、51~100名、101~150名、151名以上の4群に分けて、「 . 総合評価」の平均値を比較した。

- 1:「わかりやすい授業だった」に関しては、50名以下(3.72)の平均値が最も高く、151名以上(3.57)、51~100名(3.58)の平均値が低かった。
- 2:「授業全体の目標が明確だった」に関しては、50名以下(3.78)の平均値が最も高く、151名以上(3.58)の平均値が低かった。
- 3:「学問的興味をかき立てられた」に関しては、50名以下(3.61)の平均値が最も高く、151名以上(3.39)、101~150名(3.42)、51~100名(3.42)の平均値が低かった。
- 4:「この授業を受けて満足した」に関しては、50名以下(3.72)の平均値が最も高く、151名以上(3.48)の平均値が低かった。

本来、授業規模とは無関係であるはずの授業の「わかりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」にも、授業規模の影響が明確に示されていることが興味深い。

共通して示された結果は、いずれも50名以下の授業で評価が高かったことである。

授業の「わかりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」の高いものが50名以下の授業に多いという可能性もあるが、その可能性よりも授業規模、すなわち、講義の環

境がそのまま総合評価に反映されていると考えることが妥当であろう。

このことは、教室規模、授業希望を考える上で参考にすべき数値である。

7) 項目間の相関(資料編P.71 表14)

ひとつの項目が、他の複数の項目と0.6以上の高い相関を示したものを取り上げると、以下のとおりである。

4「各回の授業内容は明確だった」と

- 1「聞きやすい話し方だった」.627
- 2「各回の授業内容の量が適切だった」.633
- 3「各回の授業のねらいは明確だった」.816

2「基本的知識が得られた」と

- 4「各回の授業内容は明確だった」.606
- 1「新しい考え方・発想に触れた」.608

1「わかりやすい授業だった」と

- 1「聞きやすい話し方だった」.705
- 2「各回の授業内容の量が適切だった」.614
- 3「各回の授業のねらいは明確だった」.678
- 4「各回の授業内容は明確だった」.734
- 3「テーマが現代的な意味を持っていた」.633

2「授業全体の目標が明確だった」と

- 3「各回の授業のねらいは明確だった」.761
- 4「各回の授業内容は明確だった」.746
- 2「基本的知識が得られた」.626
- 1「わかりやすい授業だった」.757

3「学問的興味をかきたてられた」と

- 4「各回の授業内容は明確だった」.607
- 1「新しい考え方・発想に触れた」.636
- 2「基本的知識が得られた」.621
- 1「わかりやすい授業だった」.683
- 2「授業全体の目標が明確だった」.665

4「この授業を受けて満足した」と

- 1「聞きやすい話し方だった」.622
- 3「各回の授業のねらいは明確だった」.655
- 4「各回の授業内容は明確だった」.686
- 1「新しい考え方・発想に触れた」.627
- 2「基本的知識が得られた」.655
- 1「わかりやすい授業だった」.780
- 2「授業全体の目標が明確だった」.727
- 3「学問的興味をかきたてられた」.793

この結果から、学生の講義に対する「満足度」は「聞きやすい話し方」、「授業のねらいの明確さ」、「授業内容の明確さ」、「新しい考え方・発想」、「基本的知識」、「わかりやすさ」、「授業全体の目標の明確さ」、「学問的興味」に関連することが明らかになった。

今後の授業を考える上で、参考になる資料となろう。

8) 「 . 総合評価」の平均値の学年間の比較(資料編 P.72 表 15~18)

表 15~18 は「 . 総合評価」の平均値の学年間の比較を示したものである。

まとめ

いずれの項目においても、4年生、3年生、2年生、1年生の順序に得点が高い。またそれぞれの平均値の間には統計的な有意差もある。この原因に関して可能性のある解釈としては、以下の点が考えられる。

1,2年生においては、必修科目が多く、学生の動機づけが高くないこと。

学年が上昇するに従って選択科目も多くなり、学生の動機づけが高まること。

選択必修の別にかかわりなく、学年が上昇するに従って、例えば大学における教育効果の現れとして、内発的動機づけ、講義への自己関与が高まり、授業評価が高くなっていること。

しかしこれはいずれも仮説で、今後の検討と実証が必要になろう。

4 - 3 担当教員からの所見票に対するまとめ

以下は、学部等総評に表われている担当教員からの所見票への記述に関し、主要なものをまとめたものである。

1) 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

学生からの授業評価がおおむね高得点だったことをうけて、多くの教員が自身の講義に対する学生の評価が適切かつ好意的であったと受け取っている。しかし、回答者数/履修登録者数の比率の低さ、6「授業の予習復習等に毎週あてた時間」の少なさを指摘する学部は多かった。また、7「板書の仕方が適切だった」の項目の平均値の低さについて言及する学部も多かった。

2) 自由記述欄に対する担当教員の所見のまとめ

多くの教員が学生の生の声による具体的な指摘に対して、授業改善へのヒントとして真摯に反応していることが読み取れる。

学生の自由記述からも板書や話し方など授業技術に関する指摘も多かった。

また、社会学部・社会学科では、自由記述欄から科目の内容の重なりについての指摘を今後の科目運営上、重要な問題としてとらえていることは、今回のアンケートの大きな成果ともいえよう。

また、一部で講義に対する学生と教員との認識の違いに言及している学部もあったが、そうした事実がアンケートという形で初めて把握すること自体、今後の授業改善のヒントになろう。

3) 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員が学生からの意見を踏まえ改善案を提案している。その主な内容は、板書の方法の改善、プリントや視覚教材の工夫、リアクションペーパーの活用などが多かった。

その他、フィールドワークや学生同士の討論などの教授法の工夫もいくつか指摘されていた。また、教員による授業改善を範囲外ではあるが、大教室の使い勝手の悪さも指摘されていた。さらに、多様な学生のレベルのどこに授業のレベルを合わせたらよいかという悩みもいくつかの学部で指摘されていた。

しかし、すべての学部で「改善に向けた今後の方針」が意識化され、今後の改善につながっていくことが大いに期待される。

4) 学生からの意見(自由記述)の集約

肯定的評価として多い意見は、熱心さ、学問への熱意、準備の周到さ、話の分かりやすさ、要点の繰り返し、現代的な話題、ユーモア、授業後に質問、相談に答えてくれること、練習問題やミニテストなどによる理解の促進、リアクションペーパー、小レポートの活用、ビデオ、パワーポイントなどの視覚教材の利用、e-Campusなどの利用、親切なプリント、ゲストスピーカーの活用、学生同士の討論の取り入れなどに対するものが挙げられる。

他方、否定的評価として多い意見は、板書の仕方に対する否定的評価が圧倒的に多く、それ以外には、授業の進行が早すぎる、話し方が分かりづらい、内容が難しすぎる、私語が多い、大教室の講義環境の悪さ、授業の人数が多すぎるなどが挙げられる。

5) 今後の授業改善に向けた課題の提示

個々の授業運営上の課題として、板書の仕方や話し方、進行速度の工夫、視覚教材の活用、リアクションペーパーの活用、学生相互の討議の活性化、双方向的な授業の工夫、シラバスの有効活用、予習復習時間を増やすための工夫、課題の提示などが多く指摘されていた。

また、学部・学科としての(カリキュラムの)問題として、科目の有機的な配置、科目間の内容の調整、オフィス・アワー制度の導入、学生からの意見聴取の必要性などが指摘されていた。

さらに、講義環境の問題として、私語、大教室・大人数授業問題の解決などが指摘されていた。特にこの問題は、教員個人で解決できる問題ではなく、全学で取り組むべき課題であるとの指摘があった。

5 . 学部等総評

学部等総評は、各科目の集計結果および各教員の執筆した所見票をもとに、各学部等 F D 委員会が執筆した。

各学部等総評の構成は、原則として以下のとおりである。

- 1 . 集計データからみられる結果のまとめ
- 2 . 担当教員からの所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由既述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
- 3 . 学生からの意見の集約（「肯定的評価として多い意見」、「否定的評価として多い意見」の集約）
- 4 . 今後の授業改善に向けた課題の提示

5 - 1 文学部

- 1 . 集計データからみられる結果のまとめ

全 2 3 箇条のアンケート各項目の文学部の平均値は全学とほぼ同様の傾向を示す。すなわち、2 項目を除いてほとんどが中間値の 3 ポイント台に分布する。2 項目とは 1 「授業への出席率」の 4 ポイント台と 6 の「予習復習時間」の 1 ポイント台である。

こうした傾向の中で文学部のポイントの高いものが 2 項目有る。5 の「静肅性が保たれた」、9 の「教員は授業準備を周到に行っていた」である。一方、少しではあるが、ポイントが全学平均を下回ったものには 3 「テーマが現代的な意味をもっていた」、

4 「最新の学問成果に触れた」があった。この意味を額面通りに受け取ると、授業はスムーズに運営されているが、内容上の新鮮さにはやや不満が残るということであろうか。また、全学的にはあるが、授業の予習・復習が圧倒的に低ポイントである。これは、予復習になじむ授業と必ずしもそうではないものがあるので単純には言えないが、学生への課題の出し方に工夫が要求されるように思う。

また、学生の勉強の場が「授業出席に特化している」とも言え、その評価はともかく、現在の学生の勉強にとって授業の比重が大きいことには間違いない。この点を確認しておくことは重要であると思う。

- 2 . 担当教員からの所見票のまとめ

- 2 - 1 授業評価に対する担当教員の所見まとめ

学生の授業への取り組み・参加の評価は概ね良好で、熱心に聞いてくれ、理解されている、との評価が多い。しかし、やはり多様な関心とレベルの学生への要望に応え切れなかったかは疑問・不安とする声も多く、この点での学生の不満・反応は予測の範囲内であった、とする。

一部には、回答者は比較的熱心な学生であり、アンケートそのものの意味を疑問視する声もある。板書等の技術的な指摘についてはほとんどの教員が改善を約束している。

- 2 - 2 自由記述欄に対する担当教員の所見のまとめ

学生の生の声が聞けて参考になったとの意見がおおく、これが前提になった上で多様な意見がある。

多くの教員が板書・話し方等の学生の授業進行の技術的要望については今後の授業に生かし、改善していきたい、とする。

ただし、その中でもレジュメ使用・配付、出席をとるかどうかなどでは個々の教員によって判断が区々であった。これはそれぞれの教員個々に、教育効果論・講義技術論があるわけで、ある意味で当然の事態といえよう。

しかし、学生の指摘に理解しかねるといふもの、全員の要望に応えることの難しさを指摘する声も多く、教員と学生の認識のズレも少なからずある事が確認できる。また自由記述が少ないことを問題視する指摘も多い。

2 - 3 改善に向けた今後の方針のまとめ

ほとんどの教員が指摘を生かす工夫を約束している。

教員の反応は大別すれば、授業に熱心に参加する学生の状況を好意的にみる部分と、ややこれに冷ややかに見る向きがある。これは背景に大学生像のイメージの違いがあるのではないか。如上のように、学生は授業こそを勉強の場と心得ている。これは学校として当然であるが、教室や教員とはなれた場で独自に勉強するのが大学生であると考えると、歯がゆさは否定できないからである。

3 . 学生からの意見の集約

3 - 1 肯定的評価として多い意見の集約

予想されたことであるが、ビデオ・テープ・OHPなどの視覚的教材を使用した授業への評価が高い。また、話が分かりやすく、熱心で、専門とする学問への熱意を感じさせる講義が学生の感動をよんでいる。

3 - 2 否定的評価として多い意見の集約

圧倒的に板書と話し方に集中している。読みやすく聞き取りやすい事への要望が強い。

3 1・2とも授業内容への評価・批判は全く多様でまとめきれない。多様に出ていること自体を授業の活性と見るべきではないか。

4 . 課題

板書の仕方や話し方などは学生の要望に応え分かりやすくする事が望まれる。

視覚教材の利用は要望が強く、評価がたかいが、当然授業の性格や意図によるので、学生への説明が大切と思う。

授業内容については学生の要望は多様である。したがって、シラバスや初回の授業においてその意図を説明し、理解を求めることが必要。

学期中、授業中に何らかの形で学生の意見を聞き、これをフィードバックする努力が望まれる。

以上

項目別平均値（文学部）

	項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	9380	1	5	4.46	0.77
2	この授業に積極的に参加した	9375	1	5	3.61	1.02
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9377	1	5	2.75	1.00
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9357	1	5	2.85	1.07
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	9334	1	5	3.37	1.02
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	9364	1	5	1.58	0.83
この授業の進め方は...						
1	聞きやすい話し方だった	9378	1	5	3.81	1.11
2	各回の授業内容の量が適切だった	9373	1	5	3.84	0.95
3	各回の授業のねらいは明確だった	9366	1	5	3.77	0.99
4	各回の授業内容は明確だった	9354	1	5	3.83	0.98
5	十分な静粛性が保たれた	9359	1	5	4.07	0.99
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9350	1	5	3.75	1.03
7	板書のしかたが適切だった	9324	1	5	3.19	1.09
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	9207	1	5	3.38	1.24
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	9346	1	5	4.09	0.87
この授業の内容は...						
1	新しい考え方・発想に触れた	9368	1	5	3.89	0.97
2	基本的知識が得られた	9369	1	5	3.87	0.93
3	テーマが現代的な意味を持っていた	9364	1	5	3.59	1.06
4	最新の学問成果に触れた	9358	1	5	3.29	1.04
総合的にみて、この授業は...						
1	わかりやすい授業だった	9370	1	5	3.75	1.08
2	授業全体の目標が明確だった	9369	1	5	3.76	1.00
3	学問的興味をかきたてられた	9365	1	5	3.62	1.09
4	この授業を受けて満足した	9366	1	5	3.72	1.08

5 - 2 経済学部

経済学部では兼任講師の担当科目を含め、85科目でアンケートを実施した。従来、経済学部では学部独自で無差別抽出・郵送アンケート方式により授業評価アンケートを実施し、その分析を行ってきた。今回のアンケート調査は、調査日に出席したすべての学生を対象としており、より詳細な情報が得られ、有益な調査であったと評価している。

学生の授業への取り組みに関し、出席率の項目で4.37と非常に高い値が示された。同時に授業への積極的参加度も3.58と高い。しかし、大多数の科目の回答数（調査日授業出席者数）は履修登録者総数の半数以下である。今回のアンケート実施が学年末の授業時間内であったため、回答者は年間を通じて熱心に授業に出席した学生が多かったと推測される。多くの科目で履修登録者の半数以上が継続的出席をすでに放棄していたと考えられる。つまり今回のアンケート結果は通年出席をした学生による授業評価という性格が強く、途中で履修放棄をした学生の評価は調査から漏れていると考えられる。このことが全体的に評価値を押し上げていると考えられる。

授業の予復習や授業準備の数値を見ると、学生の学習時間が決定的に不十分なことがうかがえる。もちろん、多くの学生がゼミナール活動や課題レポート作成など自己学習を相当程度に行っていると思われ、この回答結果のみで学生が勉強不足であると判断するには慎重を要する。しかし、40%台のゼミナール所属率や履修放棄者比率の高さを勘案すると予習・復習を動機付ける工夫が必要と考えられる。また、学生の問題関心に即した履修計画を作りやすいカリキュラム、履修登録制度あるいは教授方法の改善の必要性を示すものと考えている。

講義方法に関する評価は全体として高かった。特に、教員の授業準備や授業内容、静粛性など予想以上に評価が高く、学部としてはひとまず安堵したというのが正直なところである。しかし、前述のように、授業への参加意欲の乏しい学生の意見はこのデータに反映されておらず、ある程度割り引いて考える必要がある。何より問題なのは回答率、言い換えれば出席率が50%を割っている科目が多いことである。履修放棄を生じさせた原因が講義方法にあるのか、履修登録制度など他の問題であるのか、より踏み込んだ検証が求められる。いずれにせよ、出席率の高い学生の講義方法に対する評価は高いが、他面で履修者の大半を出席させることには成功していない、という実態が浮き彫りとなった。履修登録や成績評価システムの再検討と共に受講者の積極的な授業参加を促す講義方法上の工夫が不可欠であろう。

講義方法に関する評価は、学部平均で見ると高いポイントを示しているが、科目間のバラツキは大きい。すなわち高い評価を獲得している科目が多数ある一方で、評価の低い科目もある程度存在する。受講者規模、必修科目と選択科目の違い、教科内容の性格などにより評価水準が規定される側面もあると思われるので、分析を慎重に行なう必要がある。だが、講義方法の工夫により改善できる余地も大きいと思われる。特に、授業の聞きやすさ、講義内容の明確性、静粛性の確保などに関しより具体的な検証が必要であろう。また、全体として評価値が低いのは板書の方法である。学生の要求と教員の意図とにギャップが存在し、双方に言い分はあるが、教員のプレゼンテーション能力の向上と工夫は継続的に図って行く必要がある。

総合的な評価では、分かりやすさ、目標の明確性、学問的興味、満足度の各項目で3.45～3.65の値を示し、ある程度満足感が充足されていると言えよう。これらの総合評価と各質問項目との相関を見ると、話し方、授業内容の量、狙いの明確性、授業内容の明確性と総合評価との間で強い相関が確認できる。また、授業内容に関しては、新しい考え方、基本的知識、テーマの現代性、最新の学問成果の全項目で強い相関性が示される。学生は科目の専門性に高い期待を抱いて受講し、適切な講義方法を通じてそれが充足されることで満足度を高めるといふ、大学教育としてきわめて健全な状態が経済学部で実現していることが確認できる。こうした相関が見られる総合評価において、ある程度高い評価値を得られたことは、一定の評価を得ていると考えられる。

多くの教員がそれぞれ授業方法の改善のために様々な工夫をしていることがその一因と思われる。教員所見から、大多数の教員が今回のアンケートで示された結果に対し、反省すべき点は謙虚に反省し、その改善方法を模索していることがうかがえる。率直に言って、学生が教員の授業方法や内容に不満があるのと同様に、教員には学生の受講態度や学習意欲に不満があることは事実である。しかし、その上で学生を積極的に授業参加させ、教育効果の向上をいかに図るか、多くの教員が真摯に考えていることが明らかとなったと思われる。例えば、大規模授業が比較的多い経済学部ではリアクションペーパーの活用や授業内レポートなどは負担が重くなるが、これらの方法を積極的に取り入れる授業も多く、学生の満足度を高めていることは評価に値しよう。改善に向けた今後の方針に関しても、大半の教員がアンケート結果を踏まえて授業改善の意欲と具体的方法に立ち立った所見を示しており、今後より充実した授業が展開されることが期待できる。

全学規模での今回の授業評価アンケートの実施をめぐっては事前に様々な意見が存在した。しかし、アンケート結果とそれを受け止めた教員の姿勢を見る限り、意義ある試みであったと思われる。全体として学生は真面目かつ率直に授業を評価したと思われる。教員も今回の結果を真摯に受け止め、講義方法をより改善する機会と考えていることがその所見から確認できた。また、学生の勉学意欲の向上を図るための措置や工夫が必要であること、各科目に踏み込んだ授業改善の取り組みも必要であることも明らかになった。クラスサイズや履修登録システムなど制度面の改善も求められている。だが、全体として授業内容についてある程度良好な評価が得られたと考える。一部で経済学部の授業が弛緩しているかのような風説が流布しているが、実際には真面目に学問の習得を求める学生と授業改善を工夫する教員により「学問を教授する空間」が成立していることが確認できた点は重要な成果であると考えられる。今後は経済学部のFD委員会などでアンケートの活用方法について検討し、授業の更なる改善を図って行きたい。

項目別平均値（経済学部）

	項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	7,247	1	5	4.15	0.99
2	この授業に積極的に参加した	7,255	1	5	3.53	1.11
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,255	1	5	2.67	1.05
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,245	1	5	2.79	1.12
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	7,214	1	5	3.04	1.07
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	7,245	1	5	1.62	0.86
この授業の進め方は...						
1	聞きやすい話し方だった	7,258	1	5	3.57	1.20
2	各回の授業内容の量が適切だった	7,249	1	5	3.62	1.08
3	各回の授業のねらいは明確だった	7,244	1	5	3.64	1.08
4	各回の授業内容は明確だった	7,241	1	5	3.64	1.09
5	十分な静粛性が保たれた	7,241	1	5	3.62	1.22
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,243	1	5	3.51	1.14
7	板書のしかたが適切だった	7,218	1	5	3.09	1.19
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	7,167	1	5	3.06	1.31
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	7,231	1	5	3.89	0.99
この授業の内容は...						
1	新しい考え方・発想に触れた	7,251	1	5	3.53	1.05
2	基本的知識が得られた	7,253	1	5	3.75	1.00
3	テーマが現代的な意味を持っていた	7,244	1	5	3.77	1.07
4	最新の学問成果に触れた	7,240	1	5	3.30	1.06
総合的にみて、この授業は...						
1	わかりやすい授業だった	7,250	1	5	3.51	1.21
2	授業全体の目標が明確だった	7,249	1	5	3.58	1.08
3	学問的興味をかきたてられた	7,248	1	5	3.31	1.16
4	この授業を受けて満足した	7,248	1	5	3.45	1.18
学部等による設問						
1	この授業の教室の大きさは適切だった	6,709	1	5	3.88	1.19

5 - 3 理学部

1. 集計データからみられる結果のまとめ

理学部の学生の授業全体への出席率は他学部と比較して高く、予習復習等に費やす時間も、他学部よりは多いとのデータが出ている。しかし、学生が実際に予習復習に費やす時間は、週当たり1時間程度の場合がほとんどのようであり、それに対し教員側は、学生がより多くの時間を割くことを求めている。

授業自体に対しては、ある程度の評価は得られているが、「わかりやすい」「満足した」と感じている割合は、残念ながら他学部のそれよりも低くなっている。これには、理学部で扱っている学問分野の性質も関係しているであろう。自然科学の分野では基礎からの積み重ねが必要であり、学部1・2年の段階で基本をこなしておかなくては、先端的な話題を理解しようとする際に困難が生じる。しかし、基礎知識の学習の段階では、その先にある学問の面白さが十分には伝えられていない場合もありうる。また、基礎となる必要事項を限られた時間で扱うため、講義で扱う内容の量が多いとする意見も、数多く見受けられた。さらには、基礎的な内容の授業においても、「3)基本的な知識が得られた」という項目への評価が必ずしも高くない。講義を行う側の意図が正しく伝わっていない場合もあると見受けられる。理学部は、「5)シラバスが受講に役立った」という項目においても他学部より評価が低くなっており、科目の意図を学生に正しく伝達することの重要性を再認識する必要があると思われる。

学年別の違いを見ると、1・2年生と比べて3・4年生からの評価が高くなっており、ある程度の基礎がかためられて理解が進めば、自ずと授業への関心が高まる様子が窺われる。学科別にみると、数学科の授業に対する総合評価は、他学科のそれに比べて高いものとなっている。このことは、理学部独自の設問である「1)教員は質問・疑問に対して積極的に答えてくれた」という項目に関して、数学科の評価が最も高いことと無縁ではないであろう。また、規模の異なる授業を比較すると、人数の少ない講義のほうが評価は高い。人数が少なければ、学生の反応を見ながら講義を進めることが容易なので、この結果は納得のいくものと言えよう。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

基本的には、学生からの授業評価が「妥当である」「参考になる」という意見が多かったが、学生に対してより一層の努力を求める声も多かった。教員への質問の機会を設けても、実際に質問に来る生徒が少ないとの声もあり、学問へ自発的に取り組む姿勢を伝えることの難しさを感じられる。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

板書に対する否定的な評価（「量が多い」「速い」「字が小さい」など）話し方に対する否定的な評価（「声が小さい」「早口」など）を受けた教員が少なからず見受けられる。これらに対しては「今後に向けての反省材料とする」との所見が多く、次年度以降の改善が期待される。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

ほとんどの教員が、学生からの意見を踏まえた上での改善案を提案している。学生からの意見は多岐にわたり、また全ての意見が適切であるとは思われないが、より積極的な学習を促すべく、各教員が様々な工夫を計画している。

3 . 学生からの意見（自由記述）の集約

3 - 1 「肯定的評価として多い意見の集約」

学生の興味を引くような話し方、講義方法を実践している教員に対しては、必然的に肯定的な意見が並んでいる。単に必要な知識を列挙するという形では肯定的な評価は得られず、「重要な内容は繰り返す」「質問の内容は次回の授業に反映させる」「適切な演習問題をはさむ」等といった工夫が行われていると、たとえ高度な内容が含まれていて全てを理解できなくても、学生は高評価を与えている。プリントを配布する場合、講義の際にプリントの内容を繰り返すのみでは高評価は得られず、それ以外の話題も交えると評価が高くなる。また、ビデオ、パワーポイント、V-Campusなどの補助機器を用いる授業も、効果的に利用されている場合には高評価を得ている。

3 - 2 「否定的評価として多い意見の集約」

2-2節でも述べたように、板書に対する否定的な評価（「量が多い」「速い」「字が小さい」など）が見受けられる。「板書の量が多くて理解するための時間がない」という意見が多い一方、プリントを配って板書を減らした授業に対しては、「板書が少ない」「話を聞くだけだと集中しづらい」とする意見も出されていた。プリント、パワーポイント等の使い方に対しても、効果的に使うためには工夫が必要であることが窺われる。また、「声が小さい」「黒板の方のみを向いて授業をしている」などといった、話し方に対する否定的評価もあった。

4 . 今後の授業改善に向けた課題の提示

理学部では、学生の授業への出席率が比較的高いのに対し、満足度はそれほどでもないという現状を、真摯に受け止める必要がある。項目間の相関を見ると、教員の授業の進め方、授業内容の良さが、（少なくとも学生の認識では）総合評価の良さと関連していることが示されている。つまり、授業自体の質を上げることが、結局は高評価につながるという、あたりまえの結論に至る。単に、後で必要になるからとの理由だけで知識を与えようとしても、興味を持たず未消化に終わってしまう可能性が高いことが窺われる。単なる知識の羅列に陥らないよう、学生の興味をひきつけるべく、様々な工夫の必要性が感じら

れる。2-2 節、2-3 節でも述べたように、各教員はアンケートの結果を踏まえた上で様々な改善案を提案しているので、効果的な方法についての知識を、教員全体で共有できるような体制を作ることが大切であろう。また、アンケートに対する所見は、残念ながら 100 パーセントの教員から提出されているわけではなく、よりよい授業を作り上げていくためには、できるだけ多くの方に提出していただきたい。

一部の教員の所見で、学生が二極化しているとの指摘があった。今回のアンケートでも、授業への出席率は高いものの、予習復習には多くの時間を割いている人はあまり多くないという現状が明らかになっており、理解度の格差を拡げる一因となっていると思われる。また、学生からの質問が活発でない現状に関連して、リアクション・ペーパー方式の利用などといった、各教員の何らかの工夫が必要であろう。理学部では 2005 年度よりオフィス・アワー制度が導入されており、それをうまく授業と関連付けて有効に機能させることも重要である。少しでも多くの学生に、より多くの満足感を与えるために、教員間で議論を積み重ねていく必要性が感じられる。

項目別平均値（理学部）

	項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
	この授業へのあなたの取り組み方について...					
1	授業全体を通じての出席率(5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	3308	1	5	4.64	0.69
2	この授業に積極的に参加した	3306	1	5	3.82	1.09
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3301	1	5	2.83	1.08
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3295	1	5	2.88	1.10
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	3294	1	5	2.84	1.08
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	3299	1	5	1.97	1.00
	この授業の進め方は...					
1	聞きやすい話し方だった	3302	1	5	3.45	1.22
2	各回の授業内容の量が適切だった	3300	1	5	3.52	1.12
3	各回の授業のねらいは明確だった	3298	1	5	3.60	1.10
4	各回の授業内容は明確だった	3292	1	5	3.60	1.13
5	十分な静粛性が保たれた	3295	1	5	3.84	1.16
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3297	1	5	3.40	1.17
7	板書のしかたが適切だった	3297	1	5	3.11	1.22
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3265	1	5	2.87	1.23
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	3291	1	5	3.84	1.02
	この授業の内容は...					
1	新しい考え方・発想に触れた	3300	1	5	3.59	1.07
2	基本的知識が得られた	3300	1	5	3.71	1.06
3	テーマが現代的な意味を持っていた	3300	1	5	3.52	1.08
4	最新の学問成果に触れた	3297	1	5	3.24	1.08
	総合的にみて、この授業は...					
1	わかりやすい授業だった	3300	1	5	3.37	1.26
2	授業全体の目標が明確だった	3299	1	5	3.54	1.10
3	学問的興味をかきたてられた	3299	1	5	3.32	1.19
4	この授業を受けて満足した	3298	1	5	3.40	1.19
	学部等による質問					
1	教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	3035	1	5	3.80	1.03

5 - 4 社会学部

社会学部では、総評を以下の通り学科ごとに記述することとする。

社会学科

1. 集計データからみられる結果のまとめ

今回 FD 委員に配布されたデータは、各授業の所見入力票（集計結果グラフ（数値なし）と教員所見）、授業全体を平均した集計表、個票データのファイルだった。たとえば所見入力票に単純集計の%や平均値があれば、「満足度」が必修・選択必修・選択科目などでどう分布するか集計する、といった学科独自の集計と分析が可能になろう。ミクロな個々の授業とマクロな平均値の間のメゾレベルで利用可能なデータを集約する難しさを感じる。

また、回答者数が少ない科目に比較的高い評価が見られることがあるが、これは、授業が進むうちに受講者が淘汰されていき、興味を持ち続けた学生だけが回答した、という回答母集団の属性による可能性もある。学生の授業への期待値が高いと、同じ水準の授業でも評価は低くなることも当然想定されよう。母集団の属性と授業自体の水準をどう区別してデータを扱えばよいかわからないことを、学科 FD 委員として率直に表明しておきたい。

そのうえで、社会学部の他の 2 学科と比べ、社会学科だけが有意に低い値を示した項目を列挙する（社会学科だけ有意に高い値を示した項目はなかった）。 - 2) 授業への積極的参加、 - 3) 履修への準備、 - 4) 授業内容の明確さ、 - 7) 板書の適切さ、 - 8) 映像視覚教材の使用、 - 9) 教員の準備の周到さ、の 6 項目がそれにあたる。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

今回の調査で、社会学科は、必修科目・選択必修科目をすべて調査対象とした（選択科目は教員が対象科目を選んだ）。この 2 カテゴリーの授業評価が、カリキュラムの検討にとり重要と考えたからである。以下、必修科目・選択必修科目について所見をまとめる。

必修科目の中には、授業の内容について評価されたと考えているものの、資料・板書などといった表現への反省が記されたものがみられた。また、別の必修科目では、学生の満足度が低いこと、学生が自主的に勉強しないことへの残念さが指摘されている。学生の評価が高かったこと、基礎的内容であることの限界、統計的内容への学生のアレルギー感が見られたことを指摘している必修科目も見られた。

選択必修科目の中には、興味を持たせることには成功したが、予習・復習の少なさへの反省をしているものが見られる。この他には、パワーポイントと板書のバランスの問題、教科書を用いなかったことや全体の構成による内容の伝わりづらさ、学生が授業内容を理解できていないこと、「わかりやすさ」が足りないことへの学生の不満、受講学生の熱心さ、予習・発展的学習の少なさ、などが指摘されている。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

この欄では(3-2でも触れるが)板書の問題が多くの科目で言及されている。また、後期開講科目における前期科目との内容の重なりや担当者間の連絡不足は、学科としての科目運営上きわめて重要な問題といえるだろう。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

板書や話し方など技術的な問題が多く言及されている。また、学生に積極的に取り組ませる工夫が必要、議論のレベルが下がってもわかりやすさを、という言及もある。科目運営上では、サイバーラーニングの利用の是非、授業の配当年次の問題、コーラスシステムの活用、科目間の連携の必要性、などが指摘されている。

3 . 学生からの意見(自由記述)の集約

3 - 1 「肯定的評価として多い意見の集約」

学生からの肯定的な自由記述を教員が引用したものには、わかりやすさ、準備の周到さ、パワーポイントの利用、などがあつた。

3 - 2 「否定的評価として多い意見の集約」

2-2と重なるが、板書の問題は多くの科目で指摘されている。ある科目では、積極的な学生は物足りなさを、積極的でない学生は苦痛を感じる、とのジレンマに言及している。別の科目では、話の流れに計画性がない、シラバスを守れていない点を記す(担当者は、これは授業のねらいから当然だと自覚している)。また、科目によっては、出席をとると私語につながるのとらないこと(への不満)に言及する。理論的・抽象的でわかりにくいとの内容的な指摘を記しているものもみられた。

4 . 今後の授業改善に向けた課題の提示

以上、必修科目・選択必修科目についてのみ結果を見てきたが、大きく分けて、個々の授業の運営上の課題と、学科としてのカリキュラム設計の課題が指摘できるだろう。

前者には、板書法や話し方の改善など技術的な問題、学生の関心をどうひきつけ、予習・復習にどうつなげるかの工夫、などがあげられる。また、学生の水準が多様で、同じ内容がある学生にはやさしすぎ、ある学生には難しすぎる、出席をとることで私語がふえるが学生は出席をとらないと不満を感じる、といった相互に矛盾する課題も今回指摘された。

後者は、2006年度のカリキュラム改編で大きく条件が変化するが、2点の重要な指摘があつた。1点は、学科カリキュラムをどう各学年に配置するか、という課題である。この点については、すでに2006年度から変更が予定されている。もう1点は、同一科目・関連科目間の調整、コンセプトの明確化であり、学科運営の複数の科目相互の関係を体系化したカリキュラム運営が必要である。これも2006年へのカリキュラム改革ですでに論じられているが、旧カリキュラムについても検討を要する。

産業関係学科

1. 集計データから見られる結果のまとめ

授業の総合的評価を示す「わかりやすい授業だった」、「授業全体の目標が明確だった」、「学問的興味をかきたてられた」、「この授業を受けて満足した」の4項目については、いずれも学生から一定の評価を得ていると言えよう。授業の進め方の中では、「教員は授業の準備を周到に行っていた」が最も高く、「板書の仕方が適切だった」が際だって低かった。また、授業の内容のうち、「テーマが現代的な意味を持っていた」が最も高く、「最新の学問的成果に触れた」が最も低かった。

その一方で、学生側の授業に対する取り組みを示す5項目（「シラバスは受講に役立った」は除く）のうち、「授業全体を通じての出席率」および「この授業に積極的に参加した」はそれぞれある程度高い数字を示したが、それ以外の項目については、いずれも極端に低かった。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

所見は教員によって様々であり、総括することは難しい。ただし、いずれの教員も、学生からの評価については、肯定的な面も否定的な面も真摯に受け止めているようである。その一方で、学生に対する改善要求もあり、これらをどのように実現していくかが課題の一つであると考えられる。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が、学生の自由記述に対して丁寧に所見を述べている。学生からの指摘を真摯に受け止める一方で、学生が誤解していたり理解不足であったりする点については、その旨所見で説明している。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

これについても、教員によって様々である。しかし、多くの教員が、評価の点数が低い点について言及し、具体的な改善策を示している。

3. 学生からの意見（自由記述）の集約

3 - 1 「肯定的評価として多い意見の集約」

肯定的な意見として、教員が熱心であるとか、わからない点について授業終了後に個別に相談に乗ってくれるなどといった細かいケアをしてくれる点を上げた学生が多かった。また、視覚教材を用いたり、練習問題やミニテストなどによって理解を促進したりするなど、難しい理論をわかりやすく教えるために工夫している点を評価する声も多かった。また、授業によっては、ゲストスピーカーによる授業について肯定的な評価が多いものも見られた。

3 - 2 「否定的評価として多い意見の集約」

否定的な意見として、進行の進行が速すぎる、内容が難しすぎて理解が出来ない、教室が騒がしい、教員の声が聞き取りづらい、板書の仕方を工夫して欲しい、などという意見が目立った。多くの学生は、否定的な評価についても建設的な意見を述べているが、中には、授業の内容と全く関係のない教員個人について誹謗中傷を書いているものも見られた。この点については、学生側の「授業評価アンケート」に対する認識の改善を促す必要があると言えよう。

4 . 今後の授業改善に向けた課題の提示

板書の仕方については、評価点も低く、自由記述欄においても否定的な評価が多かった。この点については、改善していく必要がある。また、パワーポイントやビデオ等の視覚教材についても、学生の理解を促進するためには効果的であり、必要に応じて利用していくことも検討すべきであろう。ただし、この点については、科目特性の問題もあるため、必ずしも全ての科目において当てはまるわけではないという点は明記しておく必要がある。

また、自由記述欄の否定的な意見として、内容が難しく理解が不足している点が上げられた。この点については、説明の仕方、教材の使い方、進行速度などの工夫により、理解を促進する努力をしていく必要がある。

最後に、学生側の授業に望む態度についても改善が求められる。この点についても、教員としていかに改善を促すかについて検討していく必要がある。

1 . 現代文化学科

1 . 集計データからみられる結果のまとめ

社会学部に対する総合評価は、各学科とも特に低くない。「わかりやすい授業だった」、「授業全体の目標が明確だった」、「学問的興味をかきかてられた」、「この授業を受けて満足した」という4つの項目において、最低値 3.36 と最高値 3.78 の数字が示すように、比較的肯定的な評価を得ている。社会学部の学科別平均値を比較した際には、上記4項目すべてにおいて、現代文化学科が最も高い評価値を得た。

2 . 担当教員からの所見に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多岐にわたる所見を、総括するのは非常に難しいが、概ね評価点が低くないことを反映して、このような結果でしょう、という所見が多かった。比較的否定的評価を得た項目に対しては、今後の課題としたいという所見がみられた(個々の事例によって異なるが...)。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

肯定的なコメントが多く、おおむね興味を持って授業を聴いていたようである。否定

的なコメントとしては、板書の仕方に対するクレームが中心的であり、改善したいという所見がその対応として示された。非常勤の先生からは、多忙の中講義に来ているのに、授業以外の過大な要求は控えてほしい、という意見もあった。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

上記の板書の改善以外に、映像教材の使用を学生が要求しているケースがいくつかみられたため、検討したいということであった。

上記以外に、アンケートの質問や学生の意見自体に対する疑問が示されていた。例えば、パワーポイントを使用する授業などでは板書を行なわないが、板書に関する指摘は適用外ではないか等。

3 . 学生からの意見の集約

3 - 1 「肯定的評価として多い意見の集約」

わかりやすいという点が、肯定的評価になっている。また、映像を取り入れたケースに対して学生の反応が良いという特徴がみられた。授業内容と直接関係しない、先生が魅力的等の意見もある。

3 - 2 「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価として主なものは、板書の仕方である。内容がわかりにくいという意見から、多すぎる、少なすぎる、汚い、さらには誤字脱字が多いというものなどがあげられる。また、一部で講義で話している内容が理解不能あるいは、わかりにくいというような意見もあった。

4 . 今後の授業改善に向けた課題の提示

ほぼすべてのインフォーマントが、改善を検討すると回答している。内容に関しては、予習復習の時間が組めるような構成にしたい、視聴覚教材の導入を検討したい、板書を整理したい、などである。

項目別平均値（社会学部）

	項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	7137	1	5	4.28	0.94
2	この授業に積極的に参加した	7136	1	5	3.57	1.10
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7129	1	5	2.64	1.03
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7119	1	5	2.69	1.08
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	7095	1	5	3.18	1.05
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	7125	1	5	1.47	0.78
この授業の進め方は...						
1	聞きやすい話し方だった	7137	1	5	3.70	1.13
2	各回の授業内容の量が適切だった	7130	1	5	3.76	0.97
3	各回の授業のねらいは明確だった	7129	1	5	3.73	0.99
4	各回の授業内容は明確だった	7108	1	5	3.73	1.00
5	十分な静肅性が保たれた	7117	1	5	3.67	1.20
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7117	1	5	3.56	1.09
7	板書のしかたが適切だった	7101	1	5	3.00	1.11
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	7078	1	5	3.25	1.32
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	7111	1	5	3.98	0.90
この授業の内容は...						
1	新しい考え方・発想に触れた	7126	1	5	3.72	0.99
2	基本的知識が得られた	7127	1	5	3.80	0.93
3	テーマが現代的な意味を持っていた	7130	1	5	3.99	0.93
4	最新の学問成果に触れた	7119	1	5	3.40	0.96
総合的にみて、この授業は...						
1	わかりやすい授業だった	7128	1	5	3.60	1.12
2	授業全体の目標が明確だった	7125	1	5	3.65	1.00
3	学問的興味をかきたてられた	7125	1	5	3.42	1.13
4	この授業を受けて満足した	7124	1	5	3.54	1.12

5 - 5 法学部

1. 集計データからみられる結果のまとめ

法学部の回答 / 出席率 33.31%は、経済学部に次いで低い。学問的特性、授業規模の差も反映していようが、学部として出席率が低いこと自体をどう考えるか、という点は残る。

【授業内容】に関する評価について、全学部の得点に大きな差はなく、おおむね学生の反応は良好である。一方そのなかで法学部は相対的に授業の理解度、満足度が低いことが示された。法学部は、1「わかりやすい授業だった」は下から2番目、2「授業全体の目標が明確だった」は下から1番目、3「学問的興味をかきたてられた」は下から1～2番目、4「この授業を受けて満足した」は下から1番目のグループであった。

学部として関心の高い【授業規模】との相関は、単純に少人数ならよい、という評価にはならなかったが、150以上の大規模授業はやはり1～4の全ての項目で評価が低い。これに対し、101～150の中規模授業はいずれも項目でも評価が高いことが注目される。ただし、この規模の授業科目数は8科目だけで多くない。

【項目間の関連】では、教員の授業の進め方、授業内容と総合評価との関連がみられる一方、出席率、学生の勉学への態度との関連はあまりない。【学年別の傾向】については、

1～4いずれについても1年生の評価が最も低く、学年が上がるにつれ高くなる。導入、専門基礎、必修科目の教育に改善の余地があるとの解釈もありうるが、学年が上がるに従い大学の授業に慣れること、関心が明確になること、など自然な傾向も考えられる。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

評価が参考になったという所見が大半であったが、授業評価をどう解釈するか示されていない、学生の主観的評価をもって授業の良し悪しとすべきではない、との評価自体に対する意見が数件あった。多くの教員が共通の悩み、考慮点としていたのが、司法試験や専門職を志向し高い水準の内容を求める学生と、基礎的な内容を欲する（あるいはついてこられない）学生のどちらに照準を合わせるかという点である。予習復習については、全般的に低い水準にとどまっている。教員も、あえて予習復習を前提とした講義を行っていない傾向がみられる。なお、シラバスについては学生、教員とも重きをおいているかどうか不明である。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

多く取り上げられたのは、話し方（ペース、マイク音声）、板書、静粛性などについての要望であり、それぞれ改善に向けた対応が述べられている。他方で分からないならば聞きにくればよいのにそうしない、私語をする / 止めない、といった学生自身のあり方を指摘する所見もあった。後者は兼任教員に多い意見であり、立教の学生が自発的に授業改善に資する責任感が低いことが示唆される。法科大学院化に伴い一部の科目で試みられた「ソクラテス・メソッド」という教授法については、成功しているという所見と、大変困難であるという所見の両方がみられた。多くの要望が、教員自体というより大教室制と多かれ少なかれ関連していると考えられる（見易さ、静粛性など）。

それにもかかわらず、学生の指名、コメント・ペーパーなど双方向的な要素を取り入れている授業については、それがうまく機能しているとの所見が複数あった。参考に値しよう。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

概して、改善に向けた方針の記述は量が少なかった。主にはレジュメ、視覚教材、話し方、板書、教科書の使い方、といった2-2における要望への対応が中心であった。「大教室の使い勝手の悪さ」は、授業評価アンケートで想定された要素ではないが、どうしても出てくる指摘である。また、内容レベルの高低や学生の関心の惹き方については、その問題を真剣に受けとめつつ苦慮する所見の少なくない中、たとえば「内容レベルを分け、当該トピックがどのレベルであるかを明示する」という方策を示している所見もあった。

3 . 学生からの意見（自由記述）の集約

3 - 1 「肯定的評価として多い意見の集約」

一般的に多かったコメントは、第一に親切なプリント、ノートの取りやすい話し方、重要な点の繰り返し、現代的な話題、視覚教材といった伝達方法への評価である。第二に、マイクを使った学生への問いかけ、第三に教員の「熱心さ」「ユーモア」「小休止」といった要素であった。学生が授業、教員を敬愛する表現が多く、熱心な学生からのコメントが多かったことがうかがわれる。半期ではなく通年開講を求められている科目も複数あった。具体的に検討してよいのではないが。

3 - 2 「否定的意見として多い意見の集約」

多かったコメントは、講義のスピード（パワーポイントの利用については評価分かれる）、単調さ、狙いの分かりにくさ、「脱線」、板書やプリントの見にくさ、教科書販売の方法、講義の時間帯、教室環境の劣悪さ（空調等）、そして私語対策である。「インターアクティブな手法を取るなら大人数では無理があった。せめて1 / 3 くらいの人数にしないと授業が間延びしてしまい、効果が薄れる」との意見もあった。

4 . 今後の授業改善に向けた課題の提示

法学部として、全般的課題といえるのが、大教室・大人数による授業にともなう問題である。これらの点は、施設の改善、伝達方法（音声、視覚、教材その他）の改善などによって実現可能なところから補うしかないが、教員個人としてではなく、全学、学部として取り組むべき点もあろう。また大人数であることとも関連して、理解度の高い学生とそうでない学生のギャップが大きくなる傾向がある。一つの工夫として、学期末の評価だけではなく、授業中の双方向的なフィードバックをより広く取り入れることを考えてよいのではないが。ただしソクラテス・メソッドの試みについては相反する評価が与えられているように、その方法については教員間、学内外の情報交換を深めることが有益であろう。

なお、立教の学生は、授業への意欲、不満を持ちながらも、能動的に解決することに慣

れていないようである。自主性なくして大学では学び得ないことを体得してもらうには、予習復習を強化することで補えるのか、体系的な取り組みが必要か、検討の余地がある。

また、授業評価アンケートの個別項目が伝達方法を主に問うており、そこから示された知見も多いが、これらの項目に偏っている、満足度が高いのに答案の水準は低い、との教員コメントもあった。カリキュラムFDを含め、多様な次元で学部・立教全体の教育内容の改善を図ることが、学生、教員両者にとって、本当に利益のある評価制度となろう。

項目別平均値（法学部）

	項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	7,207	1	5	4.31	1.01
2	この授業に積極的に参加した	7,211	1	5	3.45	1.15
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,201	1	5	2.55	1.02
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,201	1	5	2.66	1.11
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	7,185	1	5	3.04	1.08
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	7,197	1	5	1.75	0.91
この授業の進め方は...						
1	聞きやすい話し方だった	7,205	1	5	3.57	1.25
2	各回の授業内容の量が適切だった	7,202	1	5	3.54	1.12
3	各回の授業のねらいは明確だった	7,190	1	5	3.57	1.11
4	各回の授業内容は明確だった	7,184	1	5	3.60	1.14
5	十分な静粛性が保たれた	7,179	1	5	3.80	1.15
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,178	1	5	3.47	1.17
7	板書のしかたが適切だった	7,079	1	5	2.86	1.13
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	7,070	1	5	2.92	1.24
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	7,178	1	5	3.85	1.02
この授業の内容は...						
1	新しい考え方・発想に触れた	7,193	1	5	3.61	1.06
2	基本的知識が得られた	7,194	1	5	3.75	1.03
3	テーマが現代的な意味を持っていた	7,188	1	5	3.79	1.04
4	最新の学問成果に触れた	7,185	1	5	3.34	1.05
総合的にみて、この授業は...						
1	わかりやすい授業だった	7,193	1	5	3.46	1.26
2	授業全体の目標が明確だった	7,190	1	5	3.54	1.11
3	学問的興味をかきたてられた	7,191	1	5	3.38	1.18
4	この授業を受けて満足した	7,190	1	5	3.44	1.23

5 - 6 観光学部

1. 集計データからみられる結果のまとめ

観光学部の「学生による授業評価アンケート」(以下「学評」)結果は、文系学部の中で突出した特徴を持つ結果とは言えない。

しかし、文系学部が全体に 3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」ならびに 6「授業の予習復習等に毎週当てた時間」において、評価平均は低位にあるとは言え、これらの結果は、問題を含んでいると考えられる。それは、これらの評価が低位にあるにも関わらず、授業評価の 1「わかりやすさ」ならびに 4「満足度」が比較的高位の値を示しているからである。このことは、十分な準備をせずに講義に参加しても満足できる内容と水準に授業内容が留まっていることを示唆するからである。

以上の結果との関連で、2「基本的な知識」3「テーマの現代的意味」は伝授されているのに、1「新しい考え方・発想」ならびに 4「最新の学問成果」の伝授はそれらよりもやや低い評価に留まっていることに留意すべきである。

授業の進め方では、特に大きな問題は無い。やや問題は 7「板書の方法」である。

学部の質問項目について、4「旅行好き」は平均値が最も高く SD 値も小さいことから、学生の属性を良く示していると考えられる。しかし、そのような学生に 6「授業を通じて観光関連の仕事に興味をおぼえ」させているかという値は高くなく、これも同時に観光学部の学生の属性を示している。つまり、観光の基礎を学んでも観光経営を将来の職業として考える学生が多数派ではないことが示唆されているからである。上記との関連で考えれば、1「新しい考え方・発想」ならびに 4「最新の学問成果」を伝授するためには、従来型の観光産業やそこでの職業に連動させるだけでなく、教員が授業内容を通じて観光の社会における幅広い役割を伝える努力が必要であることが示唆される。

学生の受講態度について 2「受講中の飲食や私語」は、否定的な意見の学生が多いことが示された。これは、実態とは異なる傾向である。ただし、これが設備、規模、学年を特定するクロス集計を得て、状況を特定することができていないので、2006 年度以降の改善へ直接結びつくことは無い。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

教員は、自身の講義に関する「学評」のみを見せられ、所見を述べているので、全体としての傾向があるわけではなく、これをまとめることは、上記の 1 とは異なり、意味のあることではない。

教員からの所見の動向を示せば、多くの教員が自身の講義に対する学生の評価が、適切かつ好意的であったと受け取っている点があげられる。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

このまとめも 2 - 1 と同様である。

自由記述に対する教員の所見は、授業改善へのヒントを得ていると考えられるものと、自身の教育理念との葛藤に苦しむものとに二分されるようだ。後者は、多くの場合 2 - 1との関連で、少数意見に敏感に反応している傾向がある。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

このまとめも 2 - 1と同様である。

講義ごとの条件で、配布する補助教材、視聴覚教材、フィールドワークなどの教授法の改善が提示されている。また、問題として示された 7「板書の方法」の改善は、数人の教員が理解している。しかし、講義全体が板書で行われるものではないので、これらの理解が 7「板書の方法」の改善を促すとは言えない。

3 . 学生からの意見（自由記述）の集約

3 - 1 「肯定的評価として多い意見の集約」

補助教材の使い方、新しいトピックによる注意の喚起、講義内容の反復などが好意的に受け取られている。

3 - 2 「否定的評価として多い意見の集約」

具体的な授業方法について、カスタマイゼーションを要求する意見が多いと言える。また一部に、講義中の教員の表現方法への意見もあった。これは、各教員が十分に注意すべき点である。

4 . 今後の授業改善に向けた課題の提示

1) 講義内容と「学評」との関係

今回は「学評」の初年度であり、結果は 1 回限りの資料からのみ読むことになった。それぞれの講義には講義の特性があり、教員はそれをある程度心得て授業を行っている。そのために、満足度が理解度が低くても、内容がそのような結果を生むものであれば、1 回の資料で早急に内容を変化させる必要はない。むしろ数年継続して資料を得た後に、教員が授業内容を改善すれば良い。その場合に、例えば講義内容を分割して、進度を落とすならば、学部は講義回数を検討しなければならないなど、学部全体のカリキュラムの構成を変化させることで改善しなければならない。そのために暫く継続して同様の「学評」を行うことが改善のための方法である。

2) 授業方法と「学評」との関係

7「板書の方法」や補助教材の使い方、教授時の言語表現などが持つ問題は、早急に教員が改めるべき課題であり、次年度の「学評」の結果で、教員個人の課題か学部の課題かが判断できるであろう。

3) 観光を学ぶことの興味を喚起する必要性

学年が進行するにつれて、「学評」は好意的となる傾向があり、観光学部の教育を学生が受け入れる傾向がみられる。しかし、1「新しい考え方・発想」ならびに 4「最新の学問成果」を適切に講義に組み入れ、7「観光を学ぶことにより興味がわいた」

学生が多くなるよう努力する必要がある。観光を学ぶことが職業と直接結びつく講義内容から、各職業に共通する社会人になる準備と、観光を学ぶことで拓ける学生一人々の将来を明確に区別した講義内容を用意することが今後検討されなければならないと言えるのではないだろうか。

4) その他

2「受講中の飲食や私語」の問題は、学生がそれは「いけない」と感じているにも関わらず、実態として幅広く存在しており、理念と行動の間に矛盾があることを示唆する結果となった。今回、これを分析するためのクロス表などの資料が与えられなかったが、今後検討の余地が残されている。

項目別平均値（観光学部）

	項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	3119	1	5	4.29	0.96
2	この授業に積極的に参加した	3118	1	5	3.67	1.09
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3115	1	5	2.73	1.04
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3112	1	5	2.81	1.10
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	3098	1	5	3.27	1.05
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	3111	1	5	1.51	0.79
この授業の進め方は...						
1	聞きやすい話し方だった	3120	1	5	3.69	1.13
2	各回の授業内容の量が適切だった	3118	1	5	3.82	0.94
3	各回の授業のねらいは明確だった	3115	1	5	3.82	1.00
4	各回の授業内容は明確だった	3114	1	5	3.83	1.00
5	十分な静粛性が保たれた	3113	1	5	3.64	1.13
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3104	1	5	3.70	1.05
7	板書のしかたが適切だった	3086	1	5	3.16	1.11
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3088	1	5	3.51	1.28
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	3110	1	5	4.09	0.90
この授業の内容は...						
1	新しい考え方・発想に触れた	3116	1	5	3.77	0.99
2	基本的知識が得られた	3117	1	5	3.88	0.95
3	テーマが現代的な意味を持っていた	3114	1	5	3.92	0.96
4	最新の学問成果に触れた	3111	1	5	3.43	1.00
総合的にみて、この授業は...						
1	わかりやすい授業だった	3116	1	5	3.70	1.09
2	授業全体の目標が明確だった	3117	1	5	3.75	1.01
3	学問的興味をかきたてられた	3116	1	5	3.54	1.09
4	この授業を受けて満足した	3116	1	5	3.67	1.09
学部等による設問						
1	わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ（観光学部以外の学生は答えないこと）	2919	1	5	2.94	1.03
2	わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う	2948	1	5	3.88	0.98
3	わたしは、武蔵野新座キャンパスで学ぶことに満足している	2948	1	5	3.64	1.22
4	わたしは、旅行することが好きだ	2946	1	5	4.52	0.81
5	わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した	2944	1	5	3.35	1.17
6	わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	2941	1	5	3.18	1.22
7	わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	2940	1	5	3.30	1.21

5 - 7 コミュニティ福祉学部

1. 集計データから見られる結果のまとめ

・学年の度数に関して4年生が少ない(8.7%)という結果が出ているが、これは、コミ福の学生の多くが、3年次までに卒業に必要な単位の大半を取得していることに起因していると思われる。そして4年次に「遊んでいる」学生の存在がいるという話もあまり聞かえてこない。恐らくは、就活その他、4年次を有効に使っている結果と思われる。

・学外者が少ない(1.0%)という結果については、キャンパスの立地条件を考慮に入れても確かに低いように思われる。f-Campusなどで、コミ福の授業をより宣伝する必要があると考えられる。

・授業への取り組む姿勢としては、全体的に、出席率はよい(4.37)が、予習復習に当てる時間が少ない(1.56)傾向が顕著に見て取れる。前者はコミ福の学生の真面目さを象徴する数字と見ることができるが、後者に関しては、必ずしも教員の側が予習復習を要求している訳ではないという理由も考えられるが、学生の消極性を示唆する警告として受け止めることも必要であろう。

・授業の進め方に関しては、十分な静肅性が保たれたという項目が3.68という平均値を出しているのが興味深い。これは、立教生全体の傾向として、授業中の騒がしさがしばしば指摘されているだけに、教員側にとっては嬉しい数字と言えよう。しかしその反面、教員は授業の準備を周到に行っていたという項目が高得点とはいえ、4.0を越えていないのが気にかかるところである。この問題に関しては、何からの形で、より詳細に追究する必要があるだろう。

・授業の内容に関しては、テーマが現代的な意味を持っていたという項目が3.81となっているのは、まず満足すべき数値と言えよう。しかし最新の学問成果に触れたという項目が、3.0を越えているとはいえ、3.35という数値に留まっているのは、何に起因するのだろうか。確かに新しければよいという問題ではないが、いわゆる授業のマンネリ化傾向を示唆する数値でないか、検討を要するところである。

・総合的にみた授業に関する満足度に関しては、大体、納得のゆく数値である。ただし、学問的興味をかきたてられたという項目が、他との項目と比べて相対的に低い数値となっているのは、何を表しているのであろうか。一つは、やはり教員の側からの働きかけが今少し必要とされるということであろうが、その一方で、「学問」という言葉に対する学生たちの謙虚さの表れでもあるとみなすのは無理があるであろうか。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

a) 授業評価に対する担当教員の所見

全般的な意見

- ・概ね妥当で、自分としても納得し満足のできる数値である。
- ・学生はおおむね、真面目に、熱心に授業を理解しようとしており、感謝している。
- ・ただし、基礎知識を踏まえ、発展的な勉強を進めるための動機付けに今一つ欠けていたのは残念である。
- ・板書に関して、改善の余地がある。

少数意見

- ・毎回ミニテストを実施し、対話方式も取り入れたことが、高い評価につながったと思われる。
- ・学生はとにかく明確な数量的結論を求める傾向が強く、提示された複雑な事象について、自らの頭で思考することを怠っている傾向がある。
- ・少人数の効果には歴然たるものがある。
- ・数字、数式に対してアレルギーを示す学生が見られる。

b) 自由記述欄に対する担当教員の所見

全般的な意見

- ・自由記述欄に記入するのは、そもそもが真面目で熱心な学生であると思われ、それだけに全般的に好意的な記述が多いのも当然であるが、それでも励まされる。
- ・しかしそれだけに、私語の多さ、板書の読みにくさなどの指摘に対しては、率直に改善の余地があると思わされる。
- ・全体的にスライドなどの視覚教材は評価が高い。

少数意見

- ・少数ながら、「毎回のディスカッションは、負担だった」との意見があった。
- ・とにかく生の声を学生に届けようということで多くのゲストを招いた。それが非常に成功したと思う。
- ・毎回リアクションペーパーを書かせ、次回の授業の冒頭で、前回のリアクションペーパーを数枚ずつ紹介するという授業の開始の仕方が評価されたと思われる。
- ・新聞記事を資料として配付したことが一定の評価を得られたようである。
- ・学生は現場の話になると、真剣に聞いている。現場の話を聴きたがっている。
- ・「専門用語の説明が少し不足していた」という指摘があり、注意が必要な反省材料として受け止めたい。
- ・比較的少人数なのに大きな教室であったため、散漫になってしまったきらいがある。

c)改善に向けた今後の方針

全般的な意見

- ・板書の仕方を改善する
- ・視覚教材を増やし、しかも分かりやすいものにする。
- ・大教室大人数での授業でも静肅性が保たれるよう、これまで以上に注意する。
- ・発展的な勉強への意欲を高めるよう努めたい。
- ・学生相互の討議を活発化させたい

少数意見

- ・遅刻をしてくる学生は、他の学生の気を散らせるので、後ろの入り口の近くに、初めから場所を確保しておくことにしたい。
- ・次回の授業のテーマ、検討したい課題を一層明確に提示し、予めテーマについて考えてきてもらう工夫を行いたい。
- ・「CHORUS」に、遅くとも資料を使用する一週間前に、資料を掲載し、しかもいつ用いる資料かをはっきり明記しておく。

アンケート自体に対する感想

- ・個人名と、評価点の入ったファイルをメールなどで送信するのは止めた方がよい。
- ・教員に手を触れるなど注意しておきながら、用紙配布や回収を教員が行うのは奇異だし不愉快である。

項目別平均値（コミュニティ福祉学部）

	項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	3,684	1	5	4.36	0.85
2	この授業に積極的に参加した	3,690	1	5	3.63	1.02
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,680	1	5	2.68	0.98
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,681	1	5	2.88	1.06
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	3,672	1	5	3.26	1.03
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	3,682	1	5	1.52	0.78
この授業の進め方は...						
1	聞きやすい話し方だった	3,691	1	5	3.66	1.09
2	各回の授業内容の量が適切だった	3,688	1	5	3.74	0.95
3	各回の授業のねらいは明確だった	3,686	1	5	3.74	1.00
4	各回の授業内容は明確だった	3,681	1	5	3.77	1.00
5	十分な静粛性が保たれた	3,680	1	5	3.75	1.11
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,681	1	5	3.66	1.03
7	板書のしかたが適切だった	3,674	1	5	2.98	0.97
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3,672	1	5	3.46	1.16
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	3,670	1	5	4.02	0.88
この授業の内容は...						
1	新しい考え方・発想に触れた	3,688	1	5	3.91	0.96
2	基本的知識が得られた	3,687	1	5	3.90	0.88
3	テーマが現代的な意味を持っていた	3,685	1	5	4.13	0.87
4	最新の学問成果に触れた	3,673	1	5	3.56	0.95
総合的にみて、この授業は...						
1	わかりやすい授業だった	3,683	1	5	3.64	1.07
2	授業全体の目標が明確だった	3,682	1	5	3.69	1.00
3	学問的興味をかきたてられた	3,681	1	5	3.57	1.08
4	この授業を受けて満足した	3,683	1	5	3.63	1.08

5 - 8 全学共通カリキュラム

1. 集計データからみられる結果のまとめ

全学共通カリキュラム（以下全カリ）では、展開科目の総合 A 群（演習を除く）において、1 教員 1 科目の実施を原則として、前期 102 科目、後期 98 科目の合計 200 科目を対象科目とし、196 科目（実施率 98%）において実施された。このうち「所見票」（2005 年 5 月 18 日現在）は、161 科目（提出率 82.1%）において提出された。

全カリにおける授業評価アンケートの回答者数は 16,963 名、回収率は 44.94%であり、この数値は全学平均値をわずかに上回るものであった。

総合評価においては、全カリの評価は学部間の比較において中位であり、特徴は見いだせない。項目間の関連においても、全学の結果と同様であった。

授業への取り組みに関しては、履修にあたっての準備、発展的な勉強の有無、予習復習への時間に関して、他学部の評価より低い傾向であった。このことは、全カリが学部専門科目と異なり、自分の専門外の授業を履修する機会が多いためであると思われるが、学生に対して「教養を高める」という観点から学習する姿勢を促す必要性を感じる。

授業の進め方に関しては、他学部と比較して静肅性が保たれていない傾向にあった。このことは、授業における履修規模別の結果からも明らかのように、履修人数に大きく作用されるようである。これまでも、web 登録や履修上限単位数の設定などでこの問題に対処してきたが、この結果を全カリとして真摯に受け止め、今後も学生の履修環境の改善に努めていきたい。また、板書の評価が低く、映像視覚教材の評価が高い傾向であったが、板書を行わずに、PowerPoint などのプレゼンテーションソフトを使用した授業が多いためであると思われる。

学年毎の比較では、他学部と比較して、1 年生が授業への積極的な参加する評価が高い傾向であった。全カリは、高校までのカリキュラム構成とは大きく異なり、自ら科目を選択することから、1 年時における興味関心をかき立てる側面が反映したものである。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

対象科目が膨大なため、下記 5. 各研究室ごとの総評に記述する。

3. 学生からの意見（自由記述）の集約

「難しいテーマがわかりやすかった」「興味が持てた」「全カリでしか扱えないテーマでよかった」といった、専門学部に見られない科目を開講していることへの好意的な意見と、相反して、「内容が多すぎた」「専門的すぎた」「内容が浅すぎた」といった、全学部の学生を対象としているが故の問題点を指摘する意見もあった。

授業運営に関しては、「先生の話し方がよい」「視覚的教材が効果的であった」といった肯定的な評価が多かったが、一方で、「私語が多かった」「字がみえなかった」「教室が狭い」といった授業運営に対する指摘も多く、教室環境等を改善する必要がある。

4．今後の授業改善に向けた課題の提示

全体の課題としては、大人数科目に対するケアである。上記1.にも示したように、全カリとしては、これまでも積極的にこの問題に対処してきており、2006年度からは、web登録対象科目の増加や履修上限単位数の減少など、改善に向けた対策を講ずる予定である。同時に、これは全学的に対処すべき問題であることを付記したい。

個別の課題に対しては、以下5．各研究室からの総評に記述する。

5．各研究室からの総評

5 - 1 人文科学教育研究室

アンケートの 総合評価を見るかぎり、特筆すべき点はないようなので、 学生 の取り組み方、 授業の進め方、 授業の内容 について概観したい。なお、統計学的有意差というものについて、筆者はまったく不案内であることを予めお断りしておきたい。

二つのカテゴリ（「思想・文化（科目コードFA）」「芸術・文学（科目コードFC）」）に関して、肯定的な結果と思われるものから挙げると、「思想・文化」については、「話し方の聞き易さ」と「新しい考え方」とであった。これは、このカテゴリの科目群が高校まであまりなじみのないものであること、そして抽象性が高いので講師もわかりやすく噛み砕いて解説しようとする傾向があること、が理由として考えられる。

「芸術・文学」は、「発展的な勉強の誘発」と「自宅での勉強時間」、それに「テキスト、プリント、参考図書等の効果」において肯定的傾向が見られた。これはやはり学生のアートへの感受性が反映した結果と思われる。

反対に否定的な結果と思われるのは、両カテゴリに共通して、「ねらいの明確さ」、「オーディオ、ヴィジュアルの活用度」、「テーマの現代性」、「学説の鮮度」であった。これらは教える側にとって反省材料と言えるかと思う。そのほか、「思想・文化」については、「テキスト、プリント、参考図書等の効果」と「教員の準備」の評価が辛く、「芸術・文学」については、「新しい考え方」の評価が辛かった。

5 - 2 社会科学教育研究室

社会科学教育研究室が担当する科目群（科目コードFB）については、項目全体を通じて、他の科目群よりも飛びぬけて高い平均得点や、低い平均得点が見られなかった。他の科目群よりも、比較的高い点数であった項目には、「テーマが現代的な意味を持っていた」と、「最新の学問成果に触れた」ということで、これは社会科学の科目の性格上、時事的にその新奇さや現代性をつかみやすいものと考えられるが、先鋭的なトピックを取り上げている担当者それぞれの努力も評価できるであろう。

各担当者による所見では、自由記述欄で、板書に関係する指摘が目立った。板書が多いことにも、少ないことにもそれぞれ学生からの不満がある一方で、パワーポイントなどの新しいメディアとの関係で、改めて板書の意味を考える必要を訴えるものもあった。

板書への評価得点としては全体的に他の項目に比べてやや低い傾向にあるが、板書の意味が受講者自身にもどれだけ積極的に理解されているかは、今後考えていくべき一つの問題であろう。

5 - 3 自然科学教育研究室

自然科学教育研究室が全力で授業を展開するにあたっては、学生の低学力化とそれに伴う理科離れを近年避けて通ることができなくなっている。数学・理科系の科目は、数式・記号の言葉をなくして語ることが本質的にできないが、それらを理解するどころか抵抗感すら抱いて入学してくる学生に対しての授業は近年困難を極めている。そのような現状を抱えながらも、『数理(科目コードFF)』においては「教室内の静粛性」や「板書の適切性」が他に比べて優位に高い事は授業運営に対する教員の努力の結果である。『物質・生命・宇宙(科目コードFE)』や『環境・人間(科目コードFD)』においても、その展開内容に対する時代的な興味・関心の集まりから「学生の授業への積極的な参加」のポイントが高く、また同時に「授業内容の明確さ」、「ねらいの明確さ」や「基本的な知識が得られた」などの項目の評価が高いことは、教員の努力の結果である。しかし、総合大学として数学・理科の科目を展開するならば、これらの現場の教員の努力のみによるのではなく、ねらいと目標を明確にする全学的な議論と支持が不可欠である。

5 - 4 情報科学教育研究室

情報(科目コードFH)の授業評価を他カテゴリと比較すると、わかりやすさ、目標の明確さ、学問的興味、満足度における数値がやや低くなる結果になった。これを分析してみると、わかりにくい理由の一つは情報の講義では英語やカタカナの専門用語が頻出するためであろう。しかも毎年技術革新が著しく、たくさんの新しい概念、手法、用語などが講義内容で扱われることが一因ではないだろうか。また目標が明確でなく感じるのは、担当者側にも責任があるが、本来実習と一緒にを行う方が理解が深まる内容を、講義だけで行うことの困難さにも一因があると考え。今後シラバスの見直しや目標設定の明確さを考え直したい。なお 2006 年度から高校における教科「情報」を履修した学生が入学するために現在授業の改変中でもあり、今後よりわかりやすく、満足できる授業にするためにいろいろな点を改善していきたいと考えている。

5 - 5 スポーツ健康科学教育研究室

スポーツ健康科学教育研究室が担当する授業科目(科目コードFD)の特徴として、履修人数が多いことがあげられる(平均 255 名)。したがって、大人数科目における問題が懸念されるが、全般的な評価としては良好であった。研究室が担当している科目は、専門学部において内容の近い科目がないため、学生にとっては新鮮で興味深く「内容」に関しては満足していたと所見票の結果から考えられる。しかし、大人数ならではの問題点も所見から浮かび上がっている。例えば、「静粛性」の問題で、教室後方の学生に

対して注意する時間が多く、授業がたびたび中断され内容が消化しきれないことである。他にも、議論を行いたいなどの要望も、各授業共通に求められており、大人数授業における静粛性の保持と議論の在り方について、研究室として検討していきたい。

項目別平均値（全学共通カリキュラム）

	項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
	この授業へのあなたの取り組み方について...					
1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	16932	1	5	4.42	0.88
2	この授業に積極的に参加した	16928	1	5	3.53	1.12
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	16913	1	5	2.53	1.05
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	16890	1	5	2.57	1.12
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	16840	1	5	3.22	1.12
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	16892	1	5	1.41	0.76
	この授業の進め方は...					
1	聞きやすい話し方だった	16926	1	5	3.70	1.14
2	各回の授業内容の量が適切だった	16908	1	5	3.75	1.00
3	各回の授業のねらいは明確だった	16896	1	5	3.70	1.03
4	各回の授業内容は明確だった	16885	1	5	3.73	1.03
5	十分な静粛性が保たれた	16882	1	5	3.34	1.29
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	16850	1	5	3.43	1.15
7	板書のしかたが適切だった	16804	1	5	2.97	1.12
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	16768	1	5	3.49	1.28
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	16850	1	5	3.99	0.93
	この授業の内容は...					
1	新しい考え方・発想に触れた	16903	1	5	3.78	1.02
2	基本的知識が得られた	16896	1	5	3.75	0.99
3	テーマが現代的な意味を持っていた	16882	1	5	3.83	1.07
4	最新の学問成果に触れた	16862	1	5	3.33	1.06
	総合的にみて、この授業は...					
1	わかりやすい授業だった	16890	1	5	3.64	1.11
2	授業全体の目標が明確だった	16890	1	5	3.63	1.03
3	学問的興味をかきたてられた	16890	1	5	3.45	1.14
4	この授業を受けて満足した	16889	1	5	3.55	1.14

5 - 9 学校・社会教育講座

1 集計データから見られる結果のまとめ

まず、講座の回答率は 75.10%で他の学部と比べても一番高い回答率である。平均が 44.34%であるから講座の回答率は群を抜いているといえよう。

次に「学部間の違い：平均値の差の検定・総合評価」についてみると、質問項目1「わかりやすい授業だった」および2「授業全体の目標が明確だった」においてはトップ(3.85および3.86)を占め、質問項目3「学問的興味をかきたてられた」および4「この授業を受けて満足した」においてもトップクラスに入っている。次に「規模別の群間の比較：平均値の差の検定・総合評価」を見てみると、いずれの項目も相対的に人数が少ない教室ほど得点が高くなっている。大規模授業では、相対的に授業の凝集性・静肅性が保たれにくいことが考えられる。特に講座の授業ではその傾向がはっきり示されているが、それは講座の多くの授業が演習・実技等を含んでおり、基本的に少人数で行う必要性が高いことと関係していると考えられる。次に「項目間の関連：相関係数」を見ると、教員の授業の進め方と授業の総合評価、授業内容と総合評価には関連が高く、授業への本人の取り組み方は他の項目とあまり関連がない傾向が示されている。この傾向は全体とほぼ同じ傾向であり、特に講座の特徴とはいえない。教員の授業の進め方の良さや授業内容の良さは総合評価の良さに関連していることは十分考えられることである。もちろん、それを因果関係とみなすことには慎重でなければならないが、一層、教員の授業への取り組みが求められる結果であると考えられる。ただし、学生の授業への取り組み方や出席率が相対的に関連しないということは、学生は自分たちの勉学態度と切り離して教員の授業を評価している可能性も高いということの意味しているのであろうか。その点をどう認識するかは全学的に検討すべき事項と考えられる。次に「学年間の差：平均値の検定・総合評価」を見ると、全体として講座が資格取得や職業につながるという目的や志向をもつ学生が受講することから、学年によらず学生のモチベーションは相対的に高めであると考えられることができる。

これらの集計データから基本的に講座を受講する学生は授業への出席状況も良好であり、授業に対してもきちんと受講し、それなりの満足を得ていることが伺える。

2 担当教員からの所見票に対するまとめ

2 - 1 「授業評価に対する教員の所見」のまとめ

授業評価に関する担当教員の所見を概観すると、総合的な評価に関しては「予測していたよりもプラスの評価がなされており、授業に積極的に参加してくれた学生に感謝したい」「総じて好意的な評価であったと感じられる」などの学生からの評価を肯定する記述が多く見られた。ただし、1件であるが「学生による授業評価は、正当性が低く、意義が乏しく、よって、それに対する所見は述べないこととした」という記述が見られたことを記しておく。その理由は字数の関係から述べられていないので、不明である。

次に各項目についてみてみると、まず、「授業への学生の取り組み方」に関して、特に予習復習に当てた時間に関して、『講義の内容自体が、予習を要するよう内容ではな

いので、この点では学生の予習・復習に当てた時間が少ないのは当然だと思う』に代表されるように、科目の性格によるものという受けとめ方が比較的多くみられた。一方で『授業への取り組みに関して、予習・準備が数値的に低いのは担当教員として責任を感じます。レポート等の課題がないときは「教科書に目を通しておくこと」程度の指導しかしません。ほぼ毎回、授業のまとめと質問の提出をしており、各自の理解度チェックはしているつもりですが、今後は予習・準備の面にも少し気を配る必要があります』という記述もみられた。次に「授業の進め方」に関して、高い評価を得られた理由として『授業の進め方として、講義形式ではなく、学生各人の参加を求めるワークショップ形式を基本としたことにより、このような評価になったものと思われる。そういった意味では、授業の形式に特徴的な評価だと思われる』という記述に代表されるように、グループ学習、視聴覚教材の活用、リアクションペーパーの活用など、授業の進め方に工夫を凝らすことが高い評価と結びついていると受けとめている記述がかなり見られた。また、特に「板書の仕方」に言及した記述もかなり見られた。板書に関してあまり高い評価でない理由として『ほとんどプリント資料と討論で授業を進めたため、板書はごくわずかしが行っておらず、自然な結果であろう』『必要な事項に関しては配布したレジュメに記しており、配付資料の補足として板書を位置づけている。その点で系統的な板書をしていないので、ある意味で当然の結果であろう』という記述がかなり見られた。一方で『板書について不満(2)を示した学生が一部いたので、書き取りやすく、かつ、後に学生が授業を振り返る際に、授業内容を再現する手助けとなる板書を、今後工夫する所存である』と前向きに受けとめる記述も見られた。板書に関しては『パワーポイントやビデオ教材などを用いて説明することが多く、板書をあまりしないので、この部分の評価が低いのは納得がいく。板書を評価項目に入れること自体が、デジタル化時代にあってはそぐわないのではないかと考えているので、この点に関しては方針を変える心づもりはない』という記述があったが、大学の授業における板書の意味についてあらためて検討する必要がある指摘だと思われる。次に「授業内容」に関しては、特に「最新の学問成果に触れた」点に関して、『実践分析中心の授業内容は「学問成果」とは受けとめにくいのかもしれない』『この授業ではグループワークと共に現場の最新の様子を伝えることも主要なテーマとしております。このことは逆に最新の学問成果の紹介より実務的内容になりがちともいえます。そのことが結果としてでていると思われます』という記述に代表されるように、科目(講義)の性格(内容)によるものと受けとめている記述が比較的多く見られた。これは講座の科目の特徴であると見ることもできる。ただし、一方で『資格課程の授業とはいえ、最新の研究成果などの紹介が必要であることがわかった』という記述もあることを上げておきたい。

2 - 2 「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

自由記述に対する担当教員の所見の大半は授業の進め方に関するものであった。『自由記述における学生の評価も多くは極めて好意的であると感じた。しかし、その中に期

待はずれであったとか、授業の内容がやさしすぎるとの批判があったことに対しては、真摯に受けとめたい。後期の授業においては、そのような面を改善し、より多くの学生に満足度の高い授業を実践していきたい』という受けとめ方をしている記述が多く見られた。けれども、一方で『ある受講生にとって意義のある授業方法が別の人にとっては意義のあるものとは限らないという不確実性、これが教職の特徴の一つです。従って、すべての受講生を満足させることは至難の業です。もちろん、できるだけ多くの受講生にとって意義のある授業を行うことは教職に携わる者が負う責任ですが、それでも意義を感じない受講生が存在しなくなることはないでしょう。授業方法を扱う私の授業も例外ではありません。ただ、教育の営みに対する関心を深めてくれた受講生、前期に教育実習があり、その際に私の授業で扱った内容が役立ったという受講生が存在したことを率直にうれしく思います。このような喜びを実感できるというのも教職の特徴の一つなのかもしれません。ここまでに記した二つの教職の特徴を、私はこの授業を通じてあらためて実感しました。』という記述はあらためて授業の意味を問うものであると思われる。また、自由記述欄への書き込みがほとんどなかったという次のような記述もあった。

『自由記述欄への書き込みがほとんどなかったのは残念である。授業評価アンケートで比較的厳しい評価をされているにもかかわらず、具体的な指摘がなされないのでは、授業をどのように改善していけばよいのかが漠然としたままになってしまう。具体的な指摘をしないということは、受講学生自身のアンケートへの取り組みに真剣さが欠けていることを示しているのではないかという気がする。上の欄にも書いたことであるが、授業ごとの感想や意見、質問などがあまりなかったということ自体、この授業に積極的に参加しようとか自分たちの望む授業にしていこうという意欲を受講学生が持っていなかったことの現れではなからうか。』あらためてこうした授業評価のあり方を問うものであると思い紹介した次第である。

2 - 3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

担当教員により、記述に長短、具体的あるいはやや一般的といった違いは見られるが、概ね授業評価および自由記述を受けとめて改善策を記述している。比較的多い記述は授業の改善に関するもので、たとえば『1、シラバスの記載をより詳しくするとともに、必読文献・参考文献を授業開始時に一覧で配布し、各階の授業時に必要な文献・資料の確認と事前学習を指示する。2、授業後の提出するリアクション・ペーパーの書き方を提示し、発展的な学習につながるような課題を含むものとする。3、板書および配付資料の精選化、ビデオ・プロジェクターの視聴覚教材使用方法の学習などを進め、円滑な授業運営を図る。』『シラバスで授業のねらいや内容がより明確になるように工夫する。オリエンテーションの時にこの授業の目標をわかりやすく示す、各回の授業の最初にその時間のテーマと内容の概要を明確に示す。また、授業終了時に本時のまとめを取り入れ、さらに本時の授業の感想、授業内容への質問や意見などを記入してもらって時間を取る。受講学生の記述した内容を参考に次回以降の授業に生かす。視聴覚教材を積極

的に利用する。』などがその代表的な記述である。また、授業の改善には教室、受講生数などの改善も必要ではないかという記述もいくつか見られた。また、初めて授業を担当する教員からは『本大学で初めて講義を受け持ったが、まったく認知度が低い領域であり、しかもどのような学生が受講しているのかもまったくわからず、前・中半はとまどいながらの授業であった。(略)どのような学生が受講し、講座がどのような位置づけになっているのかという事前説明もなく、講義にはいるのは多少負担がかかるので、新任の非常勤講師に対してはある程度オリエンテーションは必要ではないかと思う。(略)』という指摘があったが、講座として前向きに取り組む課題であろう。

3 学生からの意見(自由記述)の集約

3-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

はじめに肯定的評価と否定的評価の記述に関しては、圧倒的に肯定的評価の記述が多かったことをあげておく。

まず、授業方法に関して、討論の取り入れ、リアクションペーパー・小レポートの活用、特にビデオに代表される視聴覚教材の活用、プリントの作成・配布などが肯定的に評価されている。次に授業内容に関しては、授業のねらいが明確であること、体験を中心とした授業であること、作業を中心とした授業であること、実践的な内容を中心とした授業であることなどが肯定的に評価されている。これは講座の科目の多くが、実技・実習等実践と深くかかわっていることの現れと見られる。また、現場の教師の活用、他学科の学生との交流なども高い評価を得ているが、これも今述べた講座の特徴といえよう。さらに、宿題の提出、出席管理の厳しさ、板書が優れていることも肯定的な評価となっている。意外に出席を厳しくすることを求める声が強いということか。また、宿題を課すことに関しても肯定的な受けとめ方をしているようだ。

3-2 「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価の意見としては、板書がうまくない、資料が少ない、教室の人数が多すぎ、視聴覚教材の扱いがうまくない、授業がうるさいなどがあげられていた。

4 今後の授業改善に向けた課題の提示

1) 講座の授業に関しては1および3で見たように概ね高い評価を得ていると見ることができ、それは各担当教員が授業にさまざまな工夫と努力をしている現れであるといえよう。特に、授業のねらいの明確化、視聴覚教材の活用、リアクションペーパーの活用、ワークショップ方式の導入、グループ活動の導入などを積極的に試みている授業の評価が高いことから、いわゆる「双方向的授業」をさらに進めていくことが課題である。

2) 講座では、特徴として実技・実習・実践にかかわる科目が比較的多数を占めており、1クラスの人数もできる限り少ない方が授業の評価も高くなっており、逆

に言えば、人数の多いクラスの授業は評価がやや低くなる傾向も伺え、1クラスの人数規模をどう考えていくかも課題である。

もちろん、この課題は講座だけで対応できる課題ではなく、全学的に教室の配置を検討する中に含まれる課題であると思われる。

3) 板書をどう考えるか、出席をどう考えるかということも授業評価とかかわっており、大学の授業をどう考えるかというそれぞれの担当教員の授業観が問われる課題である。

項目別平均値（学校・社会教育講座）

	項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
	この授業へのあなたの取り組み方について...					
1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	2481	1	5	4.61	0.65
2	この授業に積極的に参加した	2482	1	5	3.75	1.00
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2478	1	5	2.87	0.99
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2475	1	5	2.88	1.08
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	2458	1	5	3.19	1.04
6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	2473	1	5	1.58	0.82
	この授業の進め方は...					
1	聞きやすい話し方だった	2481	1	5	3.91	1.11
2	各回の授業内容の量が適切だった	2480	1	5	3.89	0.97
3	各回の授業のねらいは明確だった	2480	1	5	3.91	1.00
4	各回の授業内容は明確だった	2476	1	5	3.91	1.01
5	十分な静粛性が保たれた	2476	1	5	4.20	0.91
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2476	1	5	3.77	1.04
7	板書のしかたが適切だった	2478	1	5	3.16	1.13
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	2461	1	5	3.46	1.28
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	2474	1	5	4.17	0.85
	この授業の内容は...					
1	新しい考え方・発想に触れた	2479	1	5	3.83	0.99
2	基本的知識が得られた	2479	1	5	3.93	0.92
3	テーマが現代的な意味を持っていた	2478	1	5	3.99	0.99
4	最新の学問成果に触れた	2474	1	5	3.38	1.00
	総合的にみて、この授業は...					
1	わかりやすい授業だった	2479	1	5	3.85	1.09
2	授業全体の目標が明確だった	2479	1	5	3.86	1.00
3	学問的興味をかきたてられた	2480	1	5	3.47	1.13
4	この授業を受けて満足した	2480	1	5	3.70	1.10

6 . 集計データについて (資料編)

以下のデータの読み取りに関する留意事項

- 1 . 本調査では、すべての科目ではなく、各教員 1 科目以上の実施がなされた (2 - 3 実施対象科目、2 - 4 実施教員数・実施科目数 参照)。したがって、この集計データの解釈も、限定されたデータによるものであることを認識しておく必要がある。
- 2 . 調査実施において調査協力者の匿名性を守る必要性から、異なる科目に出席する同じ学生を一致させることができない。そこで、本分析において、度数および人数として表記されている数値は、述べ人数である。

6 - 1 学年および学内・学外者の度数

表 1 学年の度数および%

学年	度数	%
1 年	16,626	27.4
2 年	20,372	33.6
3 年	16,436	27.1
4 年	5,285	8.7
不明	1,884	3.1
計	60,603	100.0

表 2 学内者・学外者の度数および%

	度数	%
学外	631	1.0
学内	59,972	99.0
計	60,603	100.0

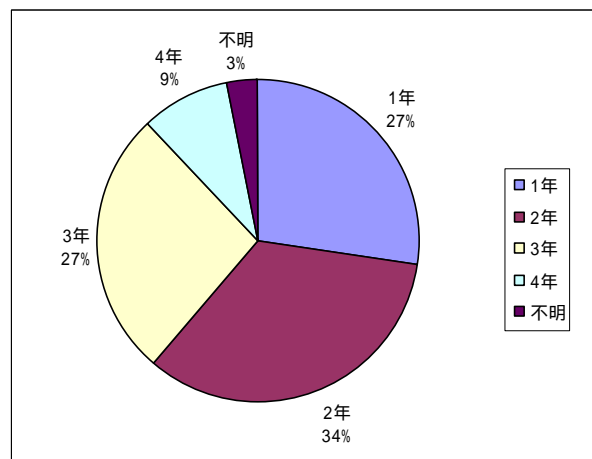


図 1 学年の度数

6 - 2 項目内容と項目別平均値（全体）

表3 各項目別平均値（全体）

	項目	人数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
この授業へのあなたの取り組み方について...						
1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	60495	1.00	5.00	4.37	0.90
2	この授業に積極的に参加した	60501	1.00	5.00	3.58	1.09
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	60449	1.00	5.00	2.65	1.04
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	60375	1.00	5.00	2.72	1.11
5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	60190	1.00	5.00	3.18	1.08
6	授業の予習復習等に毎週当たった時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	60388	1.00	5.00	1.56	0.84
この授業の進め方は...						
1	聞きやすい話し方だった	60498	1.00	5.00	3.68	1.16
2	各回の授業内容の量が適切だった	60448	1.00	5.00	3.72	1.02
3	各回の授業のねらいは明確だった	60404	1.00	5.00	3.71	1.04
4	各回の授業内容は明確だった	60335	1.00	5.00	3.73	1.05
5	十分な静粛性が保たれた	60342	1.00	5.00	3.68	1.20
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	60296	1.00	5.00	3.55	1.12
7	板書のしかたが適切だった	60061	1.00	5.00	3.04	1.13
8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	59776	1.00	5.00	3.29	1.29
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	60261	1.00	5.00	3.98	0.94
この授業の内容は...						
1	新しい考え方・発想に触れた	60424	1.00	5.00	3.74	1.02
2	基本的知識が得られた	60422	1.00	5.00	3.80	0.98
3	テーマが現代的な意味を持っていた	60385	1.00	5.00	3.81	1.04
4	最新の学問成果に触れた	60319	1.00	5.00	3.35	1.04
総合的にみて、この授業は...						
1	わかりやすい授業だった	60409	1.00	5.00	3.61	1.15
2	授業全体の目標が明確だった	60400	1.00	5.00	3.65	1.04
3	学問的興味をかきたてられた	60395	1.00	5.00	3.45	1.14
4	この授業を受けて満足した	60394	1.00	5.00	3.56	1.15

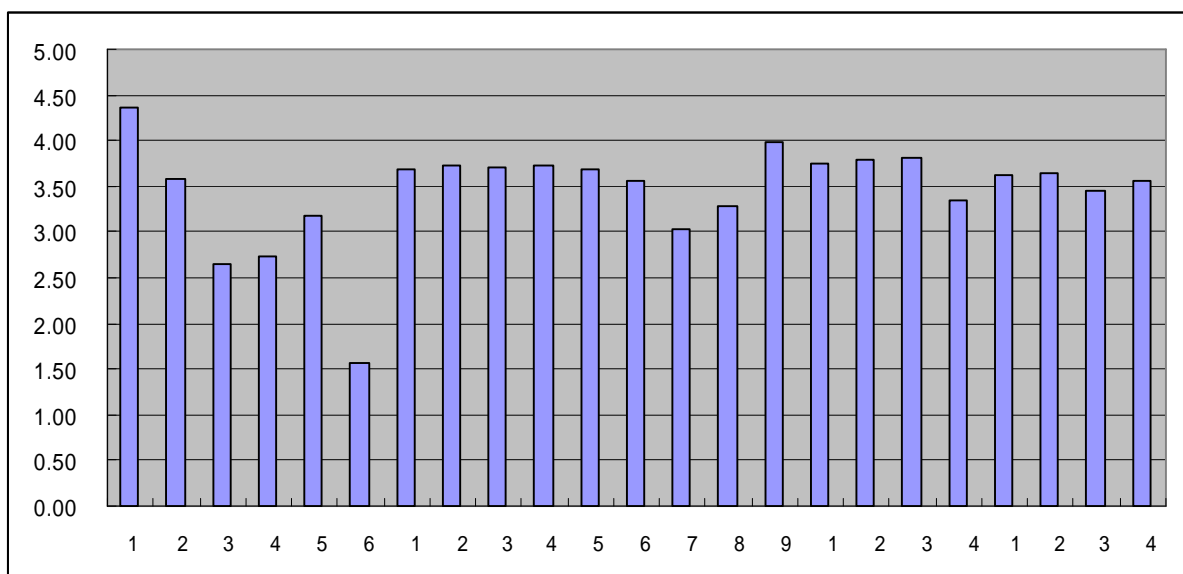


図2 各項目の平均値

6 - 3 回答者数/登録者数の比率

表4 学部毎の回答者数と登録者数、および回答者数/登録者数の比率

	登録者数	回答者数	回答/登録(%)
文	16030	9391	58.58
経済	22663	7269	32.07
理学	5981	3311	55.36
社会	16544	7145	43.19
法	21681	7223	33.31
全力リ	37744	16963	44.94
学社	3309	2485	75.10
観光	7169	3122	43.55
コミュ福	7159	3694	51.60
合計	138280	60603	44.34

注：本分析における「回答者数」とは、アンケート実施科目に当日出席し、アンケートに回答した学生のことを示す。よって、この問題について検討する際、授業へは出席していたがアンケートには回答しなかった調査協力者も存在する可能性も、考慮すべきである。

6 - 4 「 . 総合評価」の平均値の学部間の比較

6 - 4 「 . 総合評価」の平均値の学部間の比較、6 - 5 「 . 総合評価」の授業規模による比較、6 - 7 「 . 総合評価」の平均値の学年間の比較の資料の読み方：

各表の群（学部・規模別群・学年）は、平均値の低いものから昇順に並ぶ。
 同じサブグループに平均値が示されている群どうしには、差がなく、異なるサブグループにある群どうしには、有意な差がある。
 差は相対的なものなので、群の並び順だけでなく、理論的な中央値 3.0 を超えているかどうかなどの数値の水準に関する検討も必要である。

【読み方の例】

例 1

1 わかりやすい授業だった

学年	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	16,567	3.45			
2	20,328		3.59		
3	16,402			3.70	
4	5,280				3.92

人数 平均値 平均値 平均値 平均値

この場合、どの学年の間にも統計的な差があり、学年があがるほど得点が高いことが示されている。

例 2

1 わかりやすい授業だった

規模別群（人）	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ		
		1	2	3
151～	14,976	3.57		
51～100	17,797	3.58	3.58	
101～150	14,693		3.61	
～50	12,943			3.72

この場合、51～100人規模の授業は、サブグループ1と2の両方に含まれている。つまり51～100人規模の授業は、151人以上規模の授業とも101～150人規模の授業とも差がないが、151人規模の授業は101～150人規模の授業よりも得点が低いことが示されている。

表5 「 1 わかりやすい授業だった」に関する、学部毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

学 部	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ					
		1	2	3	4	5	6
理	3,300	3.37					
法	7,193						
経	7,250		3.51				
社	7,128						
コ	3,683			3.64	3.64		
全カリ	16,890			3.64	3.64		
観光	3,116				3.70	3.70	
文	9,370					3.75	
学社	2,479						3.85

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表6 「 2 授業全体の目標が明確だった」に関する、学部毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

学 部	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ					
		1	2	3	4	5	6
理	3,299	3.54					
法	7,190	3.54					
経	7,249	3.58	3.58				
全カリ	16,890		3.63				
社	7,125			3.65			
コ	3,682			3.69			
観光	3,117				3.75	3.75	
文	9,369					3.76	
学社	2,479						3.86

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表7 「 3 学問的興味をかきたてられた」に関する、学部毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

学 部	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ					
		1	2	3	4	5	6
経	7,248	3.31					
理	3,299	3.32					
法	7,191	3.38	3.38				
社	7,125		3.42				
全カリ	16,890		3.45	3.45			
学社	2,480			3.47			
観光	3,116				3.54	3.54	
コ	3,681					3.57	
文	9,365						3.62

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表8 「 4 この授業を受けて満足した」に関する、学部毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

学 部	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
理	3,298	3.40			
法	7,190	3.44			
経	7,248	3.45			
社	7,124				
全カリ	16,889		3.55		
コ	3,683				
観光	3,116			3.67	3.67
学社	2,480			3.70	3.70
文	9,366				3.72

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

6 - 5 「 . 総合評価」の授業規模による比較

「資料の読み方」および「読み方の例」については、P. 68 を参照のこと。

表9 各群の科目数

規模別群	～ 50	51～100	101～150	151～	計
科目数	508	254	122	67	951

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表10 「 1 わかりやすい授業だった」に関する、規模別群毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

規模別群(人)	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ		
		1	2	3
151～	14,976	3.57	3.58	3.72
51～100	17,797			
101～150	14,693	3.61	3.61	3.72
～50	12,943			

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表11 「 2 授業全体の目標が明確だった」に関する、規模別群毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

規模別群(人)	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
151～	14,973	3.58	3.61	3.65	3.78
51～100	17,790				
101～150	14,694	3.61	3.61	3.65	3.78
～50	12,943				

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表12 「 3 学問的興味をかきたてられた」に関する、規模別群毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

規模別群(人)	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ	
		1	2
151～	14,969	3.39	3.61
101～150	14,693		
51～100	17,790	3.42	3.61
～50	12,943		

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表13 「 4 この授業を受けて満足した」に関する、規模別群毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

規模別群(人)	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ		
		1	2	3
151～	14,971	3.48	3.53	3.72
51～100	17,787			
101～150	14,693	3.54	3.54	3.72
～50	12,943			

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

6-6 項目間の相関

資料の読み方：

- ◆ 各項目どうし、どの程度関連しているか、その関連の強さが示されている。相関に関する詳細は、統計的説明 (P. 14) を参照のこと。
- ◆ 行と列の項目番号をみて、知りたい項目どうしがまじわるところの数字が、関連の強さを示す相関係数である。
- ◆ 数字の絶対値が大きいほど、関連は強く、数値がマイナスである場合は、どちらかが高得点であるほど、もう一方は低得点である傾向を示す。
- ◆ 一般的に、相関係数の絶対値は、0.20~0.40：弱い相関、0.40~0.70：比較的強い相関、0.70~1.00：強い相関とされている。本資料では、資料を読み取りやすくするため、絶対値0.4以上を太字で、0.6以上を網掛けで表記した。

表14 全学の項目間相関

	I1	I2	I3	I4	I5	I6	II1	II2	II3	II4	II5	II6	II7	II8	II9	III1	III2	III3	III4	IV1	IV2	IV3	IV4				
I.																											
授業への準備	12	477	—	511	—	611	—	453	306	243	334	297	364	375	184	272	287	186	293	385	411	301	328	394	386	423	464
状況・参加	14	176	453	611	—	404	414	298	277	353	354	217	305	309	215	262	391	403	322	388	373	381	503	461	381	503	461
態度	15	139	306	356	404	—	185	366	371	410	414	210	364	329	258	354	374	403	326	351	409	421	416	452	421	416	452
II.	16	092	243	387	414	185	—	102	074	123	118	128	131	166	069	066	146	160	086	158	123	147	204	177	147	204	177
教員の授業の進め方	II1	099	334	255	298	366	102	—	587	593	627	288	443	498	310	527	472	494	401	405	705	596	522	622	596	522	622
	II2	086	297	237	277	371	074	587	—	637	633	290	457	455	321	508	455	497	405	395	614	578	509	582	578	509	582
	II3	108	364	288	353	410	123	593	637	—	816	311	508	494	347	573	523	580	489	485	678	761	586	655	678	761	586
	II4	102	375	293	354	414	118	627	633	816	—	329	522	522	357	588	531	606	491	483	734	746	607	686	734	746	607
	II5	029	184	175	217	210	128	288	290	311	329	—	323	278	115	296	260	271	188	205	288	309	279	312	288	309	279
	II6	098	272	250	305	363	131	443	457	508	526	323	—	492	381	517	422	461	363	394	509	519	465	517	509	519	465
	II7	067	287	288	309	329	166	498	455	494	522	278	492	—	330	464	385	431	324	384	553	514	457	520	553	514	457
	II8	075	186	172	215	258	069	310	321	347	357	115	381	330	—	449	336	303	328	351	366	360	343	373	366	360	343
	II9	115	293	201	262	354	066	527	508	573	588	296	517	464	449	—	511	501	456	449	573	590	495	567	573	590	495
III.	III1	161	385	280	391	374	146	472	455	523	531	260	422	385	336	511	—	608	574	599	558	564	636	627	558	564	636
授業内容	III2	159	411	327	403	403	160	494	497	580	606	271	461	431	303	501	608	—	562	537	633	626	621	655	633	626	621
	III3	102	301	234	322	326	086	401	405	489	491	188	363	324	328	456	574	562	—	674	501	527	534	538	501	527	534
	III4	108	328	302	388	351	158	405	395	485	483	205	394	384	351	449	599	537	674	—	508	538	578	559	508	538	578
IV.	IV1	092	394	321	373	409	123	705	614	678	734	288	509	553	366	573	558	633	501	508	—	757	683	780	—	757	683
授業の総合評価	IV2	108	386	312	381	421	147	596	578	761	746	309	519	514	360	590	564	626	527	538	757	—	665	727	757	—	665
	IV3	114	423	374	503	416	204	522	509	586	607	279	465	457	343	495	636	621	534	578	683	665	—	793	683	665	—
	IV4	141	464	367	461	452	177	622	582	655	686	312	517	520	373	567	627	655	538	559	780	727	793	—	780	727	793

注：N=57626、すべてp<.01

6 - 7 「 . 総合評価」の平均値の学年間の比較

「資料の読み方」および「読み方の例」については、P.68 を参照のこと。

表 15 「 1 わかりやすい授業だった」に関する、学年毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

学年	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	16,567	3.45			
2	20,328		3.59		
3	16,402			3.70	
4	5,280				3.92

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表 16 「 2 授業全体の目標が明確だった」に関する、学年毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

学年	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	16,565	3.48			
2	20,323		3.64		
3	16,402			3.74	
4	5,280				3.92

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表 17 「 3 学問的興味をかきたてられた」に関する、学年毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

学年	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	16,567	3.32			
2	20,321		3.44		
3	16,400			3.51	
4	5,278				3.72

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

表 18 「 4 この授業を受けて満足した」に関する、学年毎の度数および平均値、一要因の分散分析の結果

学年	度 数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	16,567	3.40			
2	20,318		3.53		
3	16,401			3.65	
4	5,279				3.86

注) 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 $P < .05$

6 - 8 「所見集」の設置場所

「所見集」は以下の図書館に設置する。

池袋本館および武蔵野新座図書館：全科目

人文科学系図書館：文学部、全カリ

社会科学系図書館：経済・社会・法学部、全カリ

自然科学系図書館：理学部、全カリ

2004年度 学生による授業評価アンケート実施委員会

座長	佐々木	一也	(文学部)
	間々田	孝夫	(教務部副部長、社会学部)
	栗田	和明	(文学部)
	小野	雅夫	(理学部)
	箕口	雅博	(コミュニティ福祉学部)
	大野	久	(学校・社会教育講座)

分析協力

大学教育開発・支援センター

副センター長	大野	久	(学校・社会教育講座)
学術調査員	茂垣	まどか	

2004年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2005年10月発行

編集 立教大学 2004年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/cdshe/>

e-mail cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印刷 神谷印刷

〒115-0043 東京都北区神谷1-20-8